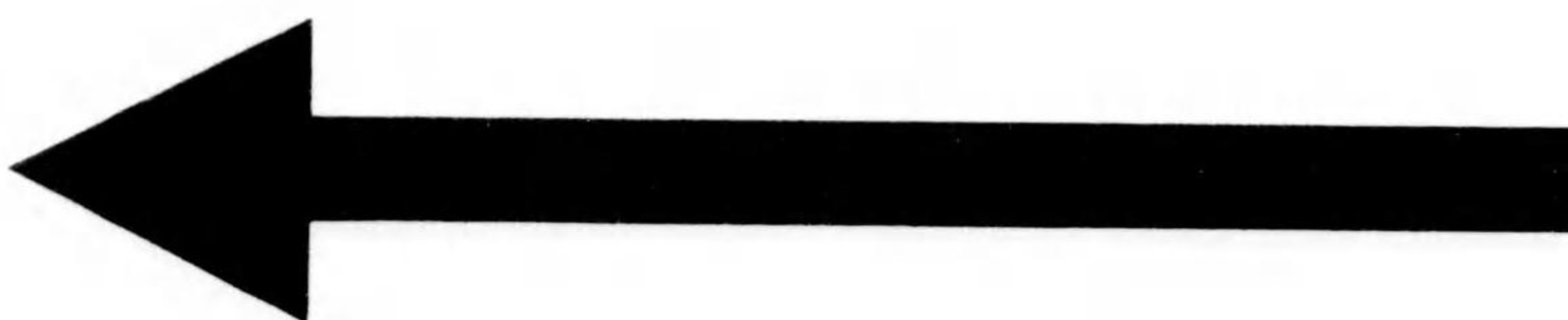


始

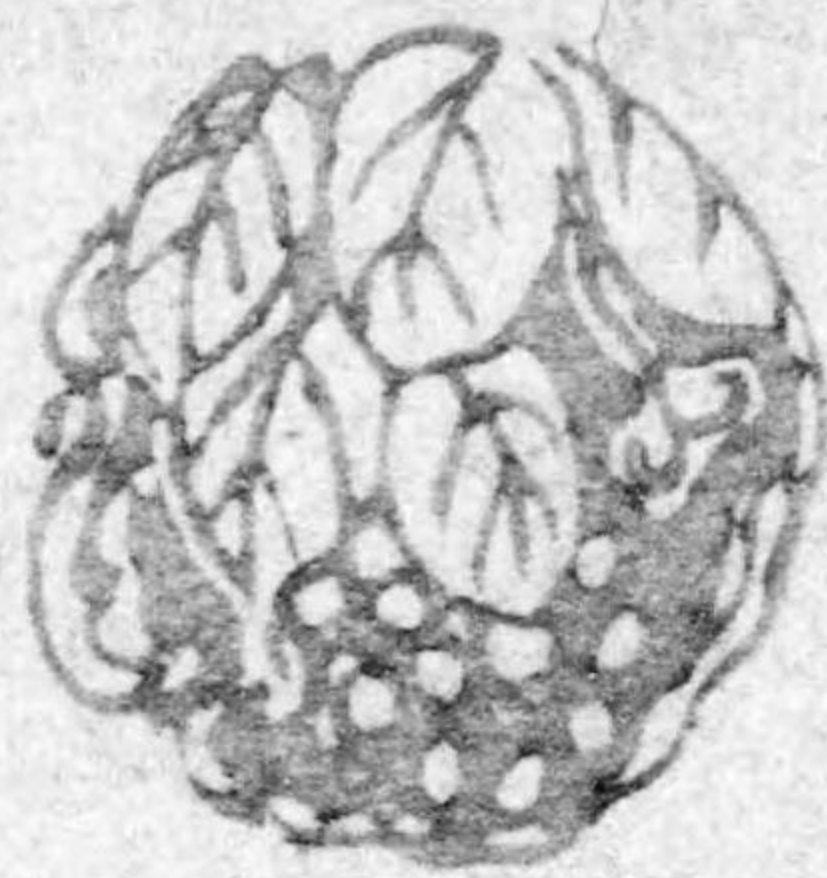


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 15 20 25 30 35 40 45 50 55 60

心

荀子解蔽篇心者形
之君也而神明之主
也禮大學疏總包萬
慮謂之心又釋名心
藏也所藏纖微無不
貫也又本也易復卦
復其見天地之心乎
註天地以水為心者





大正
6. 5. 25
内交



大正
6. 5. 25
内交

ars
longa,
vita
brevis

特101
486

序

『心』は大正三年四月から八月にわたつて東京大阪兩朝日へ同時に掲載された小説である。

當時の豫告には數種の短篇を合してそれに『心』といふ標題を冠らせる積だと讀者に斷つたのであるが、其短篇の第一に當る『先生の遺書』を書き込んで行くうちに、豫想通り早く片が附かない事を發見したので、とうとうその一篇丈を單行本に纏めて公にする方針に模様がへをした。

然し此『先生の遺書』も自から獨立したやうな又關係の深いやうな三個の姉妹篇から組み立てられてゐる以上、私はそれを『先生と私』、『兩親と私』、『先生と遺書』とに區別して、全體に『心』といふ見出しを付けても差支ない



2 やうに思つたので、題は元の儘にして置いた。ただ中味を上中下に仕切つた丈が、新聞に出た時との相違である。

装幀の事は今迄専門家にばかり依頼してゐたのだが、今度はふとした動機から自分で遣つて見る氣になつて、箱、表紙、見返し、扉及び奥附の模様及び題字、朱印、檢印ともに、悉く自分で考案して自分で描いた。

木版の刻は伊上凡骨氏を煩はした。夫から校正には岩波茂雄君の手を借りた。兩君の好意を感謝する。

大正三年九月

夏目漱石

目次

上先生と私	一頁
中兩親と私	一四七頁
下先生と遺書	二二二頁

こ
こ
ろ

漱
石

上 先生と私

一

私は其人を常に先生と呼んでゐた。だから此處でもただ先生と書く丈で本名は打ち明けない。是は世間を憚る遠慮といふよりも、其方が私に取つて自然だからである。私は其人の記憶を呼び起すごとに、すぐ『先生』と云ひたくなる。筆を執つても心持は同じ事である。餘所餘所しい頭文字杯はとても使ふ氣にならない。

1 私
私が先生と知合ひになつたのは鎌倉である。其時私はまだ若若しい書生であつた。暑

中休暇を利用して海水浴に行つた友達からは是非来いといふ端書を受取つたので、私は多少の金を工面して、出掛ける事にした。私は金の工面に二、三日を費した。所が私が鎌倉に著いて三日と経たないうちに、私を呼び寄せた友達は、急に國元から歸れといふ電報を受け取つた。電報には母が病氣だからと斷つてあつた。けれども友達はそれを信じなかつた。友達はかねてから國元にある親達に進まない結婚を強ひられてゐた。彼は現代の習慣からいふと結婚するにはあまり年が若過ぎた。それに肝腎かんじんの當人が氣に入らなかつた。夫で夏休みに當然歸るべき所を、わざと避けて東京の近くで遊んでゐたのである。彼は電報を私に見せて何うしようかと相談をした。私には何うして可いいからなかつた。けれども實際彼の母が病氣であるとすれば彼は固より歸るべき筈であつた。それで彼はとうとう歸る事になつた。折角來た私は一人取り残された。

學校の授業が始まるにはまだ大分だいぶん日數があるので、鎌倉に居つても可よし、歸つても可

いといふ境遇にゐた私は、當分元の宿に留まる覺悟をした。友達は中國の或る資産家の息子で金に不自由のない男であつたけれども、學校が學校なのと年が年なので、生活の程度は私とさう變りもしなかつた。従つて一人坊ひとりぼっちちになつた私は別に恰好な宿を探す面倒を有もたなかつたのである。

宿は鎌倉でも邊鄙な方角にあつた。玉突だのアイスクリームだのといふハイカラなものには長い暇を一つ越さなければ手が届かなかつた。車で行つても二十錢は取られた。けれども個人の別荘は其處此處にいくつでも建てられてゐた。それに海へは極近いので海水浴をやるには至極便利な地位を占めてゐた。

私は毎日海へ這入りに出掛けた。古い燻ぶり返つた藁葺の間を通り抜けて磯へ下りると、此邊にこれ程の都會人種が住んでゐるかと思ふ程、避暑に來た男や女で砂の上が動いてゐた。ある時は海の中が錢湯せんたうの様に黒い頭でごちやごちやしてゐる事もあつた。其

4 中に知つた人を一人も有たない私も、斯ういふ賑やかな景色に裹まれて、砂の上に寝そべつて見たり、膝頭を波に打たして其處いらを跳ね廻るのは愉快であつた。

私は實に先生を此雜沓の間に見附け出したのである。其時海岸には掛茶屋が二軒あつた。私は不圖した機會はすみから其一軒の方に行き慣れてゐた。長谷邊はせに大きな別莊を構へてゐる人と違つて、各自めいめいに専有の著換場を拵へてゐない此處いらの避暑客には、是非共斯うした共同著換所といつた風なものが必要なものであつた。彼等は此處で茶を飲み、此處で休息する外に、此處で海水著を洗濯させたり、此處で鹹しほはゆい身體からだを清めたり、此處へ帽子や傘を預けたりするのである。海水著を持たない私にも持物を盗まれる恐れはあつたので、私は海へ這入る度に其茶屋へ一切を脱ぎ棄てる事にしてゐた。

二

私が其掛茶屋で先生を見た時は、先生が丁度著物を脱いで是から海へ入らうとする所であつた。私は其反對に濡れた身體を風に吹かして水から上つて來た。二人の間には目を遮る幾多の黒い頭が動いてゐた。特別の事情のない限り、私は遂に先生を見逃したかも知れなかつた。それ程濱邊が混雜し、それ程私の頭が放漫であつたにも拘らず、私がすぐ先生を見附け出したのは、先生が一人の西洋人を伴れてゐたからである。

其西洋人の優れて白い皮膚の色が、掛茶屋へ入るや否や、すぐ私の注意を惹いた。純粹の日本の浴衣を著てゐた彼は、それを床几の上にすほりと放り出した儘、腕組をして海の方を向いて立てゐた。彼は我我の穿く猿股一つの外何物も肌に着けてゐなかつた。私には夫が第一不思議だつた。私は其二日前に由井ヶ濱迄行つて、砂の上にしやがみながら、長い間西洋人の海へ入る様子を眺めてゐた。私の尻を卸した所は少し小高い丘の上で、其すぐ傍わきがホテルの裏口になつてゐたので、私の凝こもとしてゐる間に、大分多くの

6 男が潮を浴びに出て来たが、いづれも胴と腕と股は出してゐなかつた。女は殊更肉を隠し勝ちであつた。大抵は頭に護謨製の頭巾を被つて、海老茶や紺や藍の色を波間に浮かしてゐた。さういふ有様を目撃した計りの私の眼には、猿股一つで濟まして皆の前に立つてゐる此西洋人が如何にも珍らしく見えた。

彼はやがて自分の傍を顧て、其處にござんでゐる日本人に、一言二言何か云つた。其日本人は砂の上に落ちた手拭を拾ひ上げてゐる所であつたが、それを取り上げるや否や、すぐ頭を包んで、海の方へ歩き出した。其人が即ち先生であつた。

私は單に好奇心の爲に、竝んで濱邊を下りて行く二人の後姿を見守つてゐた。すると彼等は眞直に波の中に足を踏み込んだ。さうして遠淺の磯近くにわいわい騒いでゐる多人数の間を通り抜けて、比較的廣廣した所へ來ると二人とも泳ぎ出した。彼等の頭が小く見える迄沖の方へ向いて行つた。夫から引き返して又一直線に濱邊迄戻つて來た。掛

茶屋へ歸ると、井戸の水も浴びずに、すぐ身體を拭いて著物を著て、さつさと何處へか行つて仕舞つた。

彼等の出て行つた後、私は矢張り元の床几に腰を卸して煙草を吹かしてゐた。其時私はほかんとしながら先生の事を考へた。どうも何處かで見た事のある顔の様に思はれてならなかつた。然し何うしても何時何處で會つた人か想ひ出せずに仕舞つた。

其時の私は屈托がないといふより寧ろ無聊に苦しんでゐた。それで翌日も亦先生に會つた時刻を見計らつて、わざわざ掛茶屋迄出かけて見た。すると西洋人は來ないで先生一人麥藁帽を被つて遣つて來た。先生は眼鏡をとつて臺の上に置いて、すぐ手拭で頭を包んで、すたすた濱を下りて行つた。先生が昨日の様に騒がしい浴客の中を通り抜けて、一人で泳ぎ出した時、私は急に其後が追ひ掛けたくなつた。私は浅い水を頭の上迄跳ねかして相當の深さの所迄來て其處から先生を目標に拔手を切つた。すると先生は昨日と

8 違つて、一種の弧線を描いて、妙な方向から岸の方へ歸り始めた。それで私の目的は遂に達せられなかつた。私が陸^{をか}へ上つて竿の垂れる手を振りながら掛茶屋に入ると、先生はもうちやんと著物を著て入れ違ひに外へ出て行つた。

三

私は次の日も同じ時刻に濱へ行つて先生の顔を見た。其次の日にも亦同じ事を繰返した。けれども物を云ひ掛ける機會も、挨拶をする場合も、二人の間には起らなかつた。其上先生の態度は寧ろ非社交的であつた。一定の時刻に超然として來て、また超然と歸つて行つた。周圍がいくら賑やかでも、それには殆ど注意を拂ふ様子が見えなかつた。最初一所に來た西洋人は其後丸で姿を見せなかつた。先生はいつでも一人であつた。或時先生が例の通りさつさと海から上つて來て、いつもの場所に脱ぎ棄てた浴衣を著

ようとすると、何うした譯か、其浴衣に砂が一杯著いてゐた。先生はそれを落すために、後向^{うしろむき}になつて、浴衣を二三度振つた。すると著物の下に置いてあつた眼鏡が板の隙間から下へ落ちた。先生は白緋の上へ兵兒帶を締めてから、眼鏡の失^なくなつたのに氣が附いたと見えて、急にそこいらを探し始めた。私はすぐ腰掛の下へ首と手を突ツ込んで眼鏡を拾ひ出した。先生は有難うと云つて、それを私の手から受け取つた。

次の日私は先生の後につづいて海へ飛び込んだ。さうして先生と一所の方角に泳いで行つた。二丁程沖へ出ると、先生は後^{うしろ}を振り返つて私に話し掛けた。廣い蒼い海の表面に浮いてゐるものは、其近所に私等二人より外になかつた。さうして強い太陽の光が、眼の届く限り水と山を照してゐた。私は自由と歡喜に充ちた筋肉を動かして海の中で躍り狂つた。先生は又ばかりと手足の運動を已めて仰向^{うむむけ}になつた儘浪の上に寐た。私も其眞似をした。青空の色がざらざらと眼を射るやうに痛烈な色を私の顔に投げ附けた。『愉

快ですね』と私は大きな聲を出した。

しばらくして海の中で起き上る様に姿勢を改めた先生は、『もう歸りませんか』と云つて私を促した。比較的強い體質を有つた私は、もつと海の中で遊んでゐたかつた。然し先生から誘はれた時、私はすぐ『ええ歸りませう』と快く答へた。さうして二人で又元の路を濱邊へ引き返した。

私は是から先生と懇意になつた。然し先生が何處にゐるかは未だ知らなかつた。

夫から中二日置いて丁度三日目の午後だつたと思ふ。先生と掛茶屋で出會つた時、先生は突然私に向つて、『君はまだ大分長く此處に居る積ですか』と聞いた。考へのない私は斯ういふ問に答へる丈の用意を頭の中に蓄へてゐなかつた。それで『何うだか分りません』と答へた。然しにやにや笑つてゐる先生の顔を見た時、私は急に極りが悪くなつた。『先生は？』と聞き返さずにはゐられなかつた。是が私の口を出た先生といふ言葉の

始まりである。

私は其晩先生の宿を尋ねた。宿と云つても普通の旅館と違つて、廣い寺の境内にある別荘のやうな建物であつた。其處に住んでゐる人の先生の家族でない事も解つた。私が先生先生と呼び掛けるので、先生は苦笑ひをした。私はそれが年長者に對する私の口癖だと云つて辯解した。私は此間の西洋人の事を聞いて見た。先生は彼の風變りの所や、もう鎌倉にゐない事や、色色の話をした末、日本人にさへあまり交際を有たないのに、さういふ外國人と近附きになつたのは不思議だと云つたりした。私は最後に先生に向つて、何處かで先生を見たやうに思ふけれども、何うしても思ひ出せないと云つた。若い私は其時暗に相手も私と同じ様な感じを有つてゐはしまいかと疑つた。さうして腹の中で先生の返事を豫期してかかつた。所が先生はしばらく沈吟したあとで、『何うも君の顔には見覚えがありませんね。人違ひぢやないですか』といつたので私は變に一種の失望

四

私は月の末に東京へ歸つた。先生の避暑地を引き上げたのはそれよりずっと前であつた。私は先生と別れる時に、『是から折折御宅へ伺つても宜ござんすか』と聞いた。先生は簡單にただ『ええ入らつしやい』と云つた丈であつた。其時分の私は先生と餘程懇意になつた積でゐたので、先生からもう少し濃やかな言葉を豫期して掛つたのである。それで此物足りない返事が少し私の自信を傷めた。

私は斯ういふ事でよく先生から失望させられた。先生はそれに氣が附いてゐる様でもあり、又全く氣が附かない様でもあつた。私は又輕微な失望を繰返しながら、それがために先生から離れて行く氣にはなれなかつた。寧ろそれとは反對で、不安に搖かされる

度に、もつと前へ進みたくなつた。もつと前へ進めば、私の豫期するあるものが、何時か眼の前に満足に現はれて来るだらうと思つた。私は若かつた。けれども凡ての人間に對して、若い血が斯う素直に働かうとは思はなかつた。私は何故先生に對して丈斯んな心持が起るのか解らなかつた。それが先生の亡くなつた今日になつて、始めて解つて來た。先生は始めから私を嫌つてゐたのではなかつたのである。先生が私に示した時時の素氣ない挨拶や冷淡に見える動作は、私を遠ざけようとする不快の表現ではなかつたのである。傷ましい先生は、自分に近づかうとする人間に、近づく程の價值のないものだから止せといふ警告を與へたのである。他の懐かしみに應じない先生は、他を輕蔑する前に、まづ自分を輕蔑してゐたものと見える。

私は無論先生を訪ねる積で東京へ歸つて來た。歸つてから授業の始まる迄にはまだ二週間の日數があるので、其うちに一度行つて置かうと思つた。然し歸つて二日三日と經

つうちに、鎌倉に居た時の氣分が段段薄くなつて來た。さうして其の上に彩られる都會の空氣が、記憶の復活に伴ふ強い刺戟と共に、濃く私の心を染附けた。私は往來で學生の顔を見るたびに新しい學年に對する希望と緊張とを感じた。私はしばらく先生の事を忘れた。

授業が始まつて、一ヶ月ばかりすると私の心に、又一種の弛みゆるが出来てきた。私は何だか不足な顔をして往來を歩き始めた。物欲しさうに自分の室へやの中を見廻した。私の頭には再び先生の顔が浮いて出た。私は又先生に會ひたくなつた。

始めて先生の宅うちを訪ねた時、先生は留守であつた。二度目に行つたのは次の日曜だと覺えて居る。晴れた空が身に沁み込むやうに感ぜられる好い日和であつた。其日も先生は留守であつた。鎌倉にゐた時、私は先生自身の口から、何時でも大抵宅うちにゐるといふ事を聞いた。寧ろ外出嫌ひだといふ事も聞いた。二度來て二度とも會へなかつた私は、

其言葉を思ひ出して、理由わけもない不満を何處かに感じた。私はすぐ女關先を去らなかつた。下女の顔を見て少し躊躇して其處に立つてゐた。此前名刺を取り次いだ記憶のある下女は、私を待たして置いて又内へ這入つた。すると奥さんらしい人が代つて出て來た。美しい奥さんであつた。

私は其人から鄭寧に先生の出先を教へられた。先生は例月其日になると維司せいしヶ谷やの墓地にある或佛へ花を手向けに行く習慣なのださうである。『たつた今出た計りで、十分になるか、ならないかで御座います』と奥さんは氣の毒さうに云つて呉れた。私は會釋して外へ出た。賑やかな町の方へ一丁程歩くと、私も散歩がてら雜司ヶ谷へ行つて見る氣になつた。先生に會へるか會へないかといふ好奇心も動いた。夫ですぐ踵を回らした。

五

私は墓地の手前にある苗島の左側から這入つて、兩方に楓かへでを植ゑ附けた廣い道を奥の方へ進んで行つた。すると其端はうれに見える茶店の中から先生らしい人がふいと出て來た。私は其人の眼鏡の縁が日に光る迄近く寄つて行つた。さうして出し拔けに『先生』と大きな聲を掛けた。先生は突然立ち留まつて私の顔を見た。

『何うして……、何うして……』

先生は同じ言葉を二遍繰り返した。其言葉は森閑とした晝うちの中に異様な調子をもつて繰り返された。私は急に何とも應こたへられなくなつた。

『私の後を跟つけて來たのですか。何うして……』

先生の態度は寧ろ落附いてゐた。聲は寧ろ沈んでゐた。けれども其表情の中うちには判然はつきり云へない様な一種の曇りがあつた。

私は私が何うして此處へ來たかを先生に話した。

『誰の墓へ参りに行つたか、妻が其人の名を云ひましたか』

『いいえ其んな事は何も仰しやいません』

『さうですか。——さう、夫は云ふ筈がありませんね、始めて會つた貴方にいふ必要がないんだから』

先生は漸く得心したらしい様子であつた。然し私には其意味が丸で解らなかつた。

先生と私は通りへ出ようとして墓の間を抜けた。依撒伯拉何何の墓だの、神僕ロギンの墓だのといふ傍かたはらに、一切衆生悉有佛生と書いた塔婆などが建ててあつた。全權公使何何といふのもあつた。私は安得烈と彫り附けた小さい墓の前で、『是は何と讀むんでせう』と先生に聞いた。『アンドレとでも讀ませる積でせうね』と云つて先生は苦笑した。

先生は是等の墓標が現はす人種じんしゆの様式に對して、私程に滑稽もアイロニーも認めないらしかつた。私が丸い墓石だの細長い御影みかげの碑だのを指して、しきりに彼是云ひた

がるのを、始めのうちは黙つて聞いてゐるたが、仕舞に「貴方は死といふ事實をまだ眞面目に考へた事がありませんね」と云つた。私は黙つた。先生もそれぎり何とも云はなくなつた。

墓地の區切り目に、大きな銀杏いんげんが一本空を隠すやうに立つてゐた。其下へ來た時、先生は高い梢を見上げて、『もう少しすると、綺麗ですよ。此樹がすつかり黄葉して、ここいらの地面は金色きんいろの落葉おちばで埋まるやうになります』と云つた。先生は月に一度づつは必ず此木の下を通るのであつた。

向うの方で凸凹でこぼこの地面をならして新墓地を作つてゐる男が、蹠くつの手を休めて私達を見てゐた。私達は其處から左へ切れてすぐ街道へ出た。

是から何處へ行くといふ目的あてのない私は、ただ先生の歩く方へ歩いて行つた。先生は何時いつもより口數を利かなかつた。それでも私は左程の窮窟を感じなかつたので、ぶらぶ

ら一所に歩いて行つた。

『すぐ御宅へ御歸りですか』

『ええ別に寄る所ありませんから』

二人は又黙つて南の方へ坂を下りた。

『先生の御宅の墓地はあすこにあるんですか』と私が又口を利き出した。

『いいえ』

『何方どなたの御墓があるんですか。——御親類の御墓ですか』

『いいえ』

先生は是以外に何も答へなかつた。私も其話しはそれぎりにして切り上げた。すると一町程歩いた後で、先生が不意に其處へ戻つて來た。

『あすこには私の友達の墓があるんです』

『御友達の御墓へ毎月御参りをなさるんですか』
『さうです』

先生は其日は以外を語らなかつた。

六

私はそれから時々先生を訪問するやうになつた。行くたびに先生は在宅であつた。先生に會ふ度数が重なるに伴れて、私は益繁く先生の玄關へ足を運んだ。

けれども先生の私に對する態度は初めて挨拶をした時も、懇意になつた其後も、あまり變りはなかつた。先生は何時も靜であつた。ある時は靜過ぎて淋しい位であつた。私は最初から先生には近づき難い不思議があるやうに思つてゐた。それでゐて、何うしても近づかなければ居られないといふ感じが、何處かに強く働いた。斯ういふ感じを先生

に對して有つてゐたものは、多くの人のうちで或は私だけかも知れない。然し其私丈には此直感が後になつて事實の上に證據立てられたのだから、私は若若しいと云はれても、馬鹿氣てゐると笑はれても、それを見越した自分の直覺を、とにかく頼もしく又嬉しく思つてゐる。人間を愛し得る人、愛せずにはゐられない人、それでゐて自分の懐に入らうとするものを、手をひろげて抱き締める事の出来ない人、——是が先生であつた。

今云つた通り先生は始終靜であつた。落ち附いてゐた。けれども時として變な曇りが其顔を横切る事があつた。窓に黒い鳥影が射すやうに。射すかと思ふと、すぐ消えるに消えたが。私が始めて其曇りを先生の眉間みけんに認めたのは、雜司ヶ谷の墓地で、不意に先生を呼び掛けた時であつた。私は其異様の瞬間に、今迄快く流れてゐた心臓の潮流を一寸鈍らせた。然しそれは單に一時の結滞に過ぎなかつた。私の心は五分と經たないうちに平素の弾力を回復した。私はそれぎり暗さうなこの雲の影を忘れてしまつた。ゆく

りなくまた夫を思ひ出させられたのは、小春の盡きるに間のない或る晩の事であつた。

先生と話してゐた私は、不圖先生がわざわざ注意して呉れた銀杏の大樹を眼の前に想ひ浮かべた。勘定して見ると、先生が毎月例として墓参りに行く日が、それから丁度三日目に當つてゐた。其三日目は私の課業が午で終へる樂な日であつた。私は先生に向つて斯う云つた。

『先生雜司ヶ谷の銀杏はもう散つて仕舞つたでせうか』

『まだ空坊主からぼうずにはならないでせう』

先生はさう答へながら私の顔を見守つた。さうして其處からしばし眼を離さなかつた。私はすぐ云つた。

『今度御墓参りに入らつしやる時に御伴をしても宜よろござんすか。私は先生と一所に彼處いらが散歩して見たい』

『私は墓参りに行くんで、散歩に行くんぢやないですよ』

『然し序ついでに散歩をなすつたら丁度好いぢやありませんか』

先生は何とも答へなかつた。しばらくしてから、『私のは本當の墓参り丈なんだから』と云つて、何處迄も墓参りと散歩を切り離さうとする風に見えた。私と行きたくない口實だか何だか、私には其時の先生が、如何にも子供らしくて變に思はれた。私はなほと先へ出る氣になつた。

『ぢや御墓参りでも好いから一所に伴れて行つて下さい。私も御墓参りをしますから』

實際私には墓参りと散歩との區別が殆ど無意味のやうに思はれたのである。すると先生の眉がちよつと曇つた。眼のうちにも異様の光が出た。それは迷惑とも嫌惡とも畏怖とも片附けられない微かな不安らしいものであつた。私は忽ち雜司ヶ谷で『先生』と呼び掛けた時の記憶を強く思ひ起した。二つの表情は全く同じだつたのである。

『私は』と先生が云つた。『私はあなたに話す事の出来ない或理由があつて、他と一所にあすこへ墓参りには行きたくないのです。自分の妻さへまだ伴れて行つた事がないのです』

七

私は不思議に思つた。然し私は先生を研究する氣で其宅へ出入りをするのではなかつた。私はただ其儘にして打過ぎた。今考へると其時の私の態度は、私の生活のうちで寧ろ尊むべきものの一つであつた。私は全くそのために先生と人間らしい温い交際が出来たのだと思ふ。もし私の好奇心が幾分でも先生の心に向つて、研究的に働き掛けたなら、二人の間を繋ぐ同情の絲は、何の容赦もなく其時ふつりと切れて仕舞つたらう。若い私は全く自分の態度を自覺してゐなかつた。それだから尊いのかも知れないが、もし間違へて裏へ出たとしたら、何んな結果が二人の仲に落ちて來たらう。私は想像してもぞつ

とする。先生はそれでも、冷い眼で研究されるのを絶えず恐れてゐたのである。

私は月に二度若くは三度づつ必ず先生の宅へ行くやうになつた。私の足が段段繁くなつた時のある日、先生は突然私に向つて聞いた。

『あなたは何でさう度度私のやうなものの宅へ遣つて來るのですか』

『何でと云つて、そんな特別な意味はありません。——然し御邪魔なんですか』

『邪魔だとは云ひません』

成程迷惑といふ様子は、先生の何處にも見えなかつた。私は先生の交際の範圍の極めて狭い事を知つてゐた。先生の元の同級生などで、其頃東京に居るものは殆ど二人か三人しかないといふ事も知つてゐた。先生と同郷の學生などには時たま座敷で同座する場合もあつたが、彼等のいづれもは皆私程先生に親しみを有つてゐないやうに見受けられた。

『私は淋しい人間です』と先生が云つた。『だから貴方の來て下さる事を喜んでゐます。だから何故さう度度來るのかと云つて聞いたのです』

『そりや又何故です』

私が斯う聞き返した時、先生は何とも答へなかつた。ただ私の顔を見て『あなたは幾歳ですか』と云つた。

此問答は私に取つて頗る不得要領のものであつたが、私は其時底迄押さずに歸つて仕舞つた。しかも夫から四日と経たないうちに又先生を訪問した。先生は座敷へ出るや否や笑ひ出した。

『又來ましたね』と云つた。

『ええ來ました』と云つて自分も笑つた。

私は外の人から斯う云はれたら屹度癩に觸つたらうと思ふ。然し先生に斯う云はれた

時は、丸で反對であつた。癩に觸らない計りでなく却つて愉快だつた。

『私は淋しい人間です』と先生は其晩又此間の言葉を繰返した。『私は淋しい人間ですが、ことによると貴方も淋しい人間ぢやないですか。私は淋しくつても年を取つてゐるから、動かすにゐられるが、若いあなたには左右は行かないのでせう。動ける丈動きたいのでせう。動いて何かに打つかりたいのでせう。……』

『私はちつとも淋しくはありません』

『若いうち程淋しいものはありません。そんなら何故貴方はさう度度私の宅へ來るのですか』

此處でも此間の言葉が又先生の口から繰り返された。

『あなたは私に會つても恐らくまだ淋しい氣が何處かでしてゐるでせう。私にはあなたの爲に其淋しさを根元から引抜いて上げる丈の力がないんだから。貴方は外の方を向い

て今に手を廣げなければならなくなります。今に私の宅の方へは足が向かなくなります』
先生は斯う云つて淋しい笑ひ方をした。

八

幸ひにして先生の豫言は實現されずに濟んだ。經驗のない當時の私は、此豫言の中に
含まれてゐる明白な意義さへ了解し得なかつた。私は依然として先生に會ひに行つた。
其内いつの間にか先生の食卓で飯を食ふやうになつた。自然の結果奥さんとも口を利か
なければならぬやうになつた。

普通の人間として私は女に對して冷淡ではなかつた。けれども年の若い私の今迄經過
して來た境遇からいつて、私は殆ど交際らしい交際を女に結んだ事がなかつた。それが
原因か何うかは疑問だが、私の興味は往來で出合ふ知りもしない女に向つて多く働く丈

であつた。先生の奥さんには其前々關で會つた時、美しいといふ印象を受けた。それが
ら會ふたんびに同じ印象を受けない事はなかつた。然しそれ以外に私は是と云つて特に
奥さんに就いて語るべき何物も有たないやうな氣がした。

是は奥さんに特色がないと云ふよりも、特色を示す機會が來なかつたのだと解釋する
方が正當かも知れない。然し私はいつでも先生に附屬した一部分の様な心持で奥さんに
對してゐた。奥さんも自分の夫の所へ來る書生だからといふ好意で、私を遇してゐたら
しい。だから中間に立つ先生を取り除ければ、つまり二人はばらばらになつてゐた。そ
れで始めて知合ひになつた時の奥さんに就いては、ただ美しいといふ外に何の感じも殘
つてゐない。

ある時私は先生の宅で酒を飲まされた。其時奥さんが出て來て傍で酌をして呉れた。

先生はいつもより愉快さうに見えた。奥さんに『御前も一つ御上り』と云つて、自分の

飲み干した盃を差した。奥さんは『私は……』と辭退しかけた後、迷惑さうにそれを受取つた。奥さんは綺麗な眉を寄せて、私の半分ばかり注いで上げた盃を、唇の先へ持つて行つた。奥さんと先生の間、下のやうな會話が始まつた。

『珍しい事。私に呑めと仰しやつた事は滅多にないのね』

『御前は嫌ひだからさ。然し稀には飲むといいよ。好い心持になるよ』

『些ともならないわ。苦しいぎりでも貴夫は大變御愉快さうね、少し御酒を召上ると』

『時によると大變愉快になる。然し何時でもといふ譯には行かない』

『今夜は如何です』

『今夜は好い心持だね』

『是から毎晩少しづつ召上ると宜ござんすよ』

『左右は行かない』

『召上つて下さいよ。其方が淋しくなくつて好いから』

先生の宅は夫婦と下女だけであつた。行くたびに大抵はひつそりとしてゐた。高い笑ひ聲などの聞えた試しは丸でなかつた。或時は宅の中にあるものは先生と私だけのやうな氣がした。

『子供でもあると好いんですがね』と奥さんは私の方を向いて云つた。私は『左右ですな』と答へた。然し私の心には何の同情も起らなかつた。子供を持つた事のない其時の私は、子供をただ蒼蠅いもののように考へてゐた。

『一人貰つて遣らうか』と先生が云つた。

『貰ひツ子ぢや、ねえあなた』と奥さんは又私の方を向いた。

『子供は何時迄経つたつて出来つこないよ』と先生が云つた。

奥さんは黙つてゐた。『何故です』と私が代りに聞いた時先生は、『天罰だからさ』と云

つて高く笑つた。

九

私の知る限り先生と奥さんとは、仲の好い夫婦の一対であつた。家庭の一員として暮した事のない私のことだから、深い消息は無論解らなかつたけれども、座敷で私と對坐してゐる時、先生は何かの序に、下女を呼ばないで、奥さんと呼ぶ事があつた。(奥さんの名は静しづといつた)先生は『おい静』と何時でも襖の方を振り向いた。その呼びかたが私には優しく聞えた。返事をして出て来る奥さんの様子も甚だ素直であつた。ときたま御馳走になつて、奥さんが席へ現れる場合杯には、此關係が一層明かに二人の間に描き出される様であつた。

先生は時々奥さんを伴れて、音樂會だの芝居だのに行つた。夫から夫婦連で一週間以

内の旅行をした事も、私の記憶によると、二三度以上あつた。私は箱根から貰つた繪葉書をまだ持つてゐる。日光へ行つた時は紅葉もみぢの葉を一枚封じ込めた郵便も貰つた。

當時の私の眼に映つた先生と奥さんの間柄はまづ斯んなものであつた。そのうちにたつた一つの例外があつた。ある日私が何時もの通り、先生の女關から案内を頼まうとすると、座敷の方で誰かの話し聲がした。能く聞くと、それが尋常の談話でなくつて、どうも言逆いさかひらしかつた。先生の宅うちは女關おんなの次がすぐ座敷になつてゐるので、格子の前に立つてゐた私の耳に其言逆ひの調子丈は略分つた。さうして其うちの一人が先生だといふ事も、時々高まつて来る男の方の聲で解つた。相手は先生よりも低い音おんなので、誰だか判然はつきりしなかつたが、何うも奥さんらしく感ぜられた。泣いてゐる様でもあつた。私はどうしたものだらうと思つて、女關先で迷つたが、すぐ決心をして其儘下宿へ歸つた。妙に不安な心持が私を襲つて來た。私は書物を讀んでも呑み込む能力を失つて仕舞つ

た。約一時間ばかりすると先生が窓の下へ来て私の名を呼んだ。私は驚いて窓を開けた。先生は散歩しようかと云つて、下から私を誘つた。先刻帯の間へ包んだ儘の時計を出して見ると、もう八時過であつた。私は歸つたなりまだ袴を着けてゐた。私は夫なりすぐ表へ出た。

其晩私は先生と一所に麥酒を飲んだ。先生は元來酒量に乏しい人であつた。ある程度迄飲んで、それで酔へなければ、酔ふ迄飲んで見るといふ冒険の出来ない人であつた。

『今日は駄目です』と云つて先生は苦笑した。

『愉快になれませんか』と私は氣の毒さうに聞いた。

私の腹の中には始終先刻の事が引つ懸つて居た。肴の骨が咽喉に刺さつた時の様に、私は苦しんだ。打ち明けて見ようかと考へたり、止した方が好からうかと思ひ直したりする動搖が、妙に私の様子をそはそはさせた。

『君今夜は何うかしてゐますね』と先生の方から云ひ出した。『實は私も少し變なのですよ。君に分りますか』

私は何の答もし得なかつた。

『實は先刻妻と少し喧嘩をしてね。それで下らない神經を昂奮させて仕舞つたんです』と先生が又云つた。

『どうして……』

私には喧嘩といふ言葉が口へ出て來なかつた。

『妻が私を誤解するのです。それを誤解だと云つて聞かせても承知しないのです。つひ腹を立てたのです』

『何んなに先生を誤解なさるんですか』

先生は私の此問に答へようとはしなかつた。

『妻が考へてゐるやうな人間なら、私だつて斯んなに苦しんでゐるやしない』
先生が何んなに苦しんでゐるか、是も私には想像の及ばない問題であつた。

十

二人が歸るとき歩きながらの沈黙が一丁も二丁もつづいた。其後で突然先生が口を利き出した。

『悪い事をした。怒つて出たから妻は嘸心配をしてゐるだらう。考へると女は可哀さうなものです。私の妻などは私より外に丸で頼りにするものがないんだから』

先生の言葉は一寸其處で途切れたが、別に私の返事を期待する様子もなく、すぐ其續きへ移つて行つた。

『さう云ふと、夫の方は如何にも心丈夫の様で少し滑稽だが。君、私は君の眼に何う映

りますかね。強い人に見えますか、弱い人に見えますか』

『中位ちゆうゐに見えます』と私は答へた。此答は先生に取つて少し案外らしかつた。先生は又口を閉ぢて、無言で歩き出した。

先生の宅へ歸るには私の下宿のついでそばを通るのが順路であつた。私は其處迄来て、曲り角で分れるのが先生に濟まない様な氣がした。『序に御宅の前まで御伴しませうか』と云つた。先生は忽ち手で私を遮つた。

『もう遅いから早く歸り玉へ。私も早く歸つて遣るんだから、細君の爲に』

先生が最後に付け加へた『細君の爲に』といふ言葉は妙に其時の私の心を暖かにした。私は其言葉のために、歸つてから安心して寝る事が出来た。私は其後も長い間此『細君の爲に』といふ言葉を忘れなかつた。

先生と奥さんの間に起つた波瀾が、大したものではない事は是でも解つた。それが又滅

多に起る現象でなかつた事も、其後絶えず出入りをして來た私には略推察が出來た。それ所か先生はある時斯んな感想すら私に洩らした。

『私は世の中で女といふものをたつた一人しか知らない。妻以外の女は殆ど女として私に訴へないのです。妻の方でも、私を天下にただ一人しかない男と思つて呉れてゐます。さういふ意味から云つて、私達は最も幸福に生れた人間の一對であるべき筈です』

私は今前後の行き掛かりを忘れて仕舞つたから、先生が何の爲に斯んな自白を私にして聞かせたのか、判然云ふ事が出來ない。けれども先生の態度の眞面目であつたのと、調子の沈んでゐたのとは、今だに記憶に残つてゐる。其時ただ私の耳に異様に響いたのは、『最も幸福に生れた人間の一對であるべき筈です』といふ最後の一句であつた。先生は何故幸福な人間と云ひ切らないで、あるべき筈であると斷つたのか。私にはそれ丈が不審であつた。ことに其處へ一種の力を入れた先生の語氣が不審であつた。先生は事

實果して幸福なのだらうか、又幸福であるべき筈でありながら、それ程幸福でないのだらうか。私は心の中で疑ぐらざるを得なかつた。けれども其疑ひは一時限り何處かへ葬られて仕舞つた。

私は其うち先生の留守に行つて、奥さんと二人差向ひで話をする機會に出合つた。先生は其日横濱を出帆する汽船に乗つて外國へ行くべき友人を新橋へ送りに行つて留守であつた。横濱から船に乗る人が、朝八時半の汽車で新橋を立つのは其頃の習慣であつた。私は書物に就いて先生に話して貰ふ必要があつたので、豫め先生の承諾を得た通り、約束の九時に訪問した。先生の新橋行は前日わざわざ告別に來た友人に對する禮義として其日突然起つた出來事であつた。先生はすぐ歸るから留守でも私に待つてゐるやうにと云ひ残して行つた。それで私は座敷へ上つて、先生を待つ間、奥さんと話をした。

其時の私は既に大學生であつた。始めて先生の宅へ来た頃から見るとずつと成人した氣でゐた。奥さんとも大分懇意になつた後であつた。私は奥さんに對して何の窮屈も感じなかつた。差向ひで色色の話をした。然しそれは特色のない唯の談話だから、今では丸で忘れて仕舞つた。そのうちでたつた一つ私の耳に留つたものがある。然しそれを話す前に、一寸斷つて置きたい事がある。

先生は大學出身であつた。是は始めから私に知れてゐた。然し先生の何もしないで遊んでゐるといふ事は、東京へ歸つて少し経つてから始めて分つた。私は其時何うして遊んでゐられるのかと思つた。

先生は丸で世間に名前を知られてゐない人であつた。だから先生の學問や思想に就い

ては、先生と密接の關係を有つてゐる私より外に敬意を拂ふもののあるべき筈がなかつた。それを私は常に惜しい事だと云つた。先生は又『私のやうなものが世の中へ出て、口を利いては濟まない』と答へるきりで、取り合はなかつた。私には其答が謙遜過ぎて却つて世間を冷評する様にも聞えた。實際先生は時時昔の同級生で今著名になつてゐる誰彼を捉へて、ひどく無遠慮な批評を加へる事があつた。それで私は露骨に其矛盾を擧げて云云して見た。私の精神は反抗の意味といふよりも、世間が先生を知らないで平氣でゐるのが残念だつたからである。其時先生は沈んだ調子で、『何うしても私は世間に向つて働き掛ける資格のない男だから仕方がありません』と云つた。先生の顔には深い一種の表情がありありと刻まれた。私にはそれが失望だか、不平だか、悲哀だか、解らなかつたけれども、何しろ二の句の繼げない程に強いものだつたので、私はそれぎり何もいふ勇氣が出なかつた。

私が奥さんと話してゐる間に、問題が自然先生の事から其處へ落ちて來た。

『先生は何故あやつて、宅で考へたり勉強したりなさる丈で、世の中へ出て仕事をなさらないんでせう』

『あの人は駄目ですよ。さういふ事が嫌ひなんですから』

『つまり下らない事だと悟つてゐらつしやるんでせうか』

『悟るの悟らないのつて、——そりや女だからわたくしには解りませんが、恐らくそんな意味ぢやないでせう。矢つ張り何か遣りたいのでせう。それでゐて出來ないんです。だから氣の毒ですわ』

『然し先生は健康からいつて、別に何處も悪い所はない様ぢやありませんか』

『丈夫ですとも。何も持病はありません』

『それで何故活動が出來ないんでせう』

『それが解らないのよ、あなた。それが解る位なら私だつて、こんなに心配しやしません。わからないから氣の毒でたまらないんです』

奥さんの語氣には非常に同情があつた。それでも口元丈には微笑が見えた。外側から云へば、私の方が寧ろ眞面目だつた。私は六づかしい顔をして黙つてゐた。すると奥さんが急に思ひ出した様に又口を開いた。

『若い時はあんな人ぢやなかつたんですよ。若い時は丸で違つてゐました。それが全く變つて仕舞つたんです』

『若い時つて何時頃ですか』と私が聞いた。

『書生時代よ』

『書生時代から先生を知つてゐらつしやつたんですか』

奥さんは急に薄赤い顔をした。

奥さんは東京の人であつた。それは曾て先生からも奥さん自身からも聞いて知つてゐた。奥さんは『本當いふと合の子あひこなんですよ』と云つた。奥さんの父親はたしか鳥取か何處かの出であるのに、御母さんの方はまだ江戸といつた時分の市ヶ谷で生れた女なので奥さんは冗談半分さう云つたのである。所が先生は全く方角違ひの新潟縣人であつた。だから奥さんがもし先生の書生時代を知つてゐるとすれば、郷里の關係からでない事は明かであつた。然し薄赤い顔をした奥さんはそれより以上の話をしたくない様だつたので、私の方でも深くは聞かずに置いた。

先生と知合ひになつてから先生の亡くなる迄に、私は随分色色の問題で先生の思想や情操に觸れて見たが、結婚當時の状況に就いては、殆ど何ものも聞き得なかつた。私は

時によると、それを善意に解釋しても見た。年輩の先生の事だから、艶なまめかしい回想などを若いものに聞かせるのはわざと慎んでゐるのだらうと思つた。時によると、又それを悪くも取つた。先生に限らず、奥さんに限らず、二人とも私に比べると、一時代前の因襲のうち成人した爲に、さういふ艶つほい問題になると、正直に自分を開放する丈の勇氣がないのだらうと考へた。尤も何方も推測に過ぎなかつた。さうして何方の推測の裏にも、二人の結婚の奥に横たはる華やかなロマンスの存在を假定してゐた。

私の假定は果して誤らなかつた。けれども私はただ戀の半面丈を想像に描き得たに過ぎなかつた。先生は美しい戀愛の裏に、恐しい悲劇を持つてゐた。さうして其悲劇の何んなに先生に取つて見み惨じめなものであるかは相手の奥さんに丸で知れてゐなかつた。奥さんは今でもそれを知らずにある。先生はそれを奥さんに隠して死んだ。先生は奥さんの幸福を破壊する前に、先づ自分の生命を破壊して仕舞つた。

私は今此悲劇に就いて何事も語らない。其悲劇のために寧ろ生れ出たともいへる二人の戀愛に就いては、先刻さつき云つた通りであつた。二人とも私には殆ど何も話して呉れなかつた。奥さんは慎みのために、先生は又それ以上の深い理由のために。

ただ一つ私の記憶に残つてゐる事がある。或時花時分に私は先生と一所に上野へ行つた。さうして其處で美しい一對の男女を見た。彼等は睦まじさうに寄添つて花の下を歩いてゐた。場所が場所なので、花よりも其方そちらを向いて眼を峙ててゐる人が澤山あつた。

『新婚の夫婦のやうだね』と先生が云つた。

『仲が好ささうですね』と私が答へた。

先生は苦笑さへしなかつた。二人の男女を視線の外に置くやうな方角へ足を向けた。それから私に斯う聞いた。

『君は戀をした事がありますか』

私はないと答へた。

『戀をしたくはありませんか』

私は答へなかつた。

『したくない事はないでせう』

『ええ』

『君は今あの男と女を見て、冷評ひやかしましたね。あの冷評ひやかしのうちには君が戀を求めながら相手を得られないといふ不快の聲が交つて居ませう』

『そんな風に聞えましたか』

『聞えました。戀の満足を味はつてゐる人はもつと暖かい聲を出すものです。然し…』

…然し君、戀は罪惡ですよ。解つてゐますか』

私は急に驚かされた。何とも返事をしなかつた。

我我は群集の中に入つた。群集はいづれも嬉しさうな顔をしてゐた。其處を通り抜けて、花も人も見えない森の中へ来る迄は、同じ問題を口にする機會がなかつた。

『戀は罪惡ですか』と私が其時突然聞いた。

『罪惡です。たしかに』と答へた時の先生の語氣は前と同じ様に強かつた。

『何故ですか』

『何故だか今に解ります。今にぢやない、もう解つてゐる筈です。あなたの心はとつくの昔から既に戀で動いてゐるぢやありませんか』

私は一應自分の胸の中を調べて見た。けれども其處は案外に空虚であつた。思ひ中わたる様なものは何もなかつた。

『私の胸の中に是といふ目的物は一つもありません。私は先生に何も隠してはゐない積です』

『目的物が無いから動くのです。あれば落ち附けるだらうと思つて動きたくなるのです』

『今それ程動いちやるません』

『あなたは物足りない結果私の所に動いて來たぢやありませんか』

『それは左右さきうかも知れません。然しそれは戀とは違ひます』

『戀に上る階段なんです。異性と抱き合ふ順序としてまづ同性の私の所へ動いて來たのです』

『私には二つのものが全く性質を異にしてゐるやうに思はれます』

『いや同じです。私は男として何うしてもあなたに満足と與へられない人間なのです。それから、ある特別の事情があつて、猶更あなたに満足と與へられないでゐるのです。』

私は實際御氣の毒に思つてゐます。あなたが私から餘所へ動いて行くのは仕方がない。私は寧ろそれを希望してゐるのです。然し……』

私は變に悲しくなつた。

『私が先生から離れて行くやうに御思ひになれば仕方がありませんが、私にそんな氣の起つた事はまだありません』

先生は私の言葉に耳を貸さなかつた。

『然し氣を附けないと不可い。戀は罪惡なんだから。私の所では満足が得られない代りに危険もないが、——君、黒い長い髪で縛られた時の心持を知つてゐますか』

私は想像で知つてゐた。然し事實としては知らなかつた。いづれにしても先生のいふ罪惡といふ意味は朦朧としてよく解らなかつた。其上私は少し不愉快になつた。

『先生、罪惡といふ意味をもつと判然云つて聞かして下さい。それでなければ此問題を

此處で切上げて下さい。私自身に罪惡といふ意味が判然解るまで』

『悪い事をした。私はあなたに眞實を話してゐる氣でゐた。所が實際は、あなたを焦慮してゐたのだ。私は悪い事をした』

先生と私とは博物館の裏から鶯溪の方角に靜な歩調で歩いて行つた。垣の隙間から広い庭の一部に茂る熊笹が幽邃に見えた。

『君は私が何故毎月雜司ヶ谷の墓地に埋つてゐる友人の墓へ參るのか知つてゐますか』

先生の此問は全く突然であつた。しかも先生は私が此問に對して答へられないといふ事も能く承知してゐた。私はしばらく返事をしなかつた。すると先生は初めて氣が附いたやうに斯う云つた。

『又悪い事を云つた。焦慮せるのが悪いと思つて、説明しようとする、其説明が又あなたを焦慮せるやうな結果になる。何うも仕方がない。此問題はこれで止めませう。』

にかく戀は罪惡ですよ、よござんすか。さうして神聖なものですよ』
私には先生の話が益解らなくなつた。然し先生はそれぎり戀を口にしなかつた。

十四

年の若い私は動やともすると一圖になり易かつた。少くとも先生の眼にはさう映つてゐたらしい。私には學校の講義よりも先生の談話の方が有益なのであつた。教授の意見よりも先生の思想の方が有難いのであつた。とどの詰りをいへば、教壇に立つて私を指導して呉れる偉い人人よりも只獨りを守つて多くを語らない先生の方が偉く見えたのであつた。

『あんまり逆上のぼちや可いけません』と先生がいつた。

『覺めた結果として左右さう思ふんです』と答へた時の私には十分の自信があつた。其自信

を先生は肯うけつて呉れなかつた。

『あなたは熱に浮かされてゐるのです。熱がさめると厭いやになります。私は今のあなたから夫程ぶほどに思はれるのを苦しく感じてゐます。然し是から先の貴方に起るべき變化を豫想して見ると猶苦しくなります』

『私はそれ程輕薄に思はれてゐるんですか、それ程不信用なんですか』

『私は御氣の毒に思ふのです』

『氣の毒だが信用されないと仰しやるんですか』

先生は迷惑さうに庭の方を向いた。其庭に此間迄重さうな赤い強い色をほたほた點じてゐた椿の花はもう一つも見えなかつた。先生は座敷から此椿の花をよく眺める癖があつた。

『信用しないつて、特にあなたを信用しないんぢやない。人間全體を信用しないんで

其時生垣の向うで金魚賣りらしい聲がした。其外には何の聞えるものもなかつた。大通りから二丁も深く折れ込んだ小路は存外静かであつた。家の中は何時もの通りひっそりしてゐた。私は次の間に奥さんのゐる事を知つてゐた。黙つて針仕事か何かしてゐる奥さんの耳に私の聲が聞えるといふ事も知つてゐた。然し私は全くそれを忘れて仕舞つた。

『ぢや奥さんも信用なさらないんですか』と先生に聞いた。

先生は少し不安な顔をした。さうして直接の答へを避けた。

『私は私自身さへ信用してゐないので。つまり自分で自分が信用出来ないから、人も信用出来ないやうになつてゐるのです。自分を呪ふより外に仕方がないので』

『さう六づかしく考へれば、誰だつて、確かなものはないでせう』

『いや考へたんぢやない。遣つたんです。遣つた後で驚いたんです。さうして非常に怖くなつたんです』

私はもう少し先迄同じ道を辿つて行きたかつた。すると襖の陰で『あなた、あなた』といふ奥さんの聲が二度聞えた。先生は二度目に『何だい』といつた。奥さんは『一寸』と先生を次の間へ呼んだ。二人の間に何んな用事が起つたのか、私には解らなかつた。それを想像する餘裕を與へない程早く先生は又座敷へ歸つて來た。

『兎に角あまり私を信用しては可けませんよ。今に後悔するから。さうして自分が欺かれた返報に、残酷な復讐をするやうになるものだから』

『そりや何ういふ意味ですか』

『かつては其人の膝の前に跪いたといふ記憶が、今度は其人の頭の上に足を載せさせようとするのです。私は未來の侮辱を受けないために、今の尊敬を斥けたいと思ふのです。』

私は今より一層淋しい未來の私を我慢する代りに、淋しい今の私を我慢したいのです。自由と獨立と己とに充ちた現代に生れた我我は、其犠牲としてみんな此淋しみを味はなくてはならないでせう』

私はかういふ覺悟を有つてゐる先生に對して、云ふべき言葉を知らなかつた。

十五

其後私は奥さんの顔を見るたびに氣になつた。先生は奥さんに對しても始終斯ういふ態度に出るのだらうか。若しさうだとすれば、奥さんはそれで満足なのだらうか。

奥さんの様子は満足とも不満足とも極めやうがなかつた。私は夫程近く奥さんに接觸する機會がなかつたから。それから奥さんは私に會ふたびに尋常であつたから。最後に先生の居る席でなければ私と奥さんとは滅多に顔を合はせなかつたから。

私の疑惑はまだ其上にもあつた。先生の人間に對する此覺悟は何處から來るのだらうか。ただ冷い眼で自分を内省したり現代を觀察したりした結果なのだらうか。

先生は坐つて考へる質たちの人であつた。先生の頭さへあれば、斯ういふ態度は坐つて世の中を考へてゐても自然と出て來るものだらうか。私には左右きうばかりとは思へなかつた。先生の覺悟は生きた覺悟らしかつた。火に焼けて冷却し切つた石造家屋の輪廓とは違つてゐた。私の眼に映ずる先生はたしかに思想家であつた。けれども其思想家の纏め上げた主義の裏には、強い事實が織り込まれてゐるらしかつた。自分と切り離された他人の事實でなくつて、自分自身が痛切に味はつた事實、血が熱くなつたり脈が止まつたりする程の事實が、疊み込まれてゐるらしかつた。

是は私の胸で推測するものはない。先生自身既にさうだと告白してゐた。ただ其告白が雲の峰のやうであつた。私の頭の上に正體の知れない恐しいものを蔽おほひ被かぶせた。さ

うして何故それが恐しいか私にも解らなかつた。告白はほうとしてゐた。それで明かに私の神経を震はせた。

私は先生の此人生觀の基點に、或強烈な戀愛事情を假定して見た。(無論先生と奥さんとの間に起つた。)先生がかつて戀は罪惡だといつた事から照し合はせて見ると、多少それが手掛りにもなつた。然し先生は現に奥さんを愛してゐると私に告げた。すると二人の戀から斯んな厭世に近い覺悟が出よう筈がなかつた。『かつては其人の前に跪いたといふ記憶が、今度は其人の頭の上に足を載せさせようとする』と云つた先生の言葉は、現代一般の誰彼に就いて用ひられるべきで、先生と奥さんの間には當てはまらないものやうでもあつた。

雜司ヶ谷にある誰だか分らない人の墓、——是も私の記憶に時々動いた。私はそれが先生と深い緣故のある墓だといふ事を知つてゐた。先生の生活に近づきつつありながら、

近づく事の出来ない私は、先生の頭の中にある生命の斷片として、其の墓を私の頭の中にも受け入れた。けれども私に取つて其の墓は、全く死んだものであつた。二人の間にある生命の扉を開ける鍵にはならなかつた。寧ろ二人の間に立つて、自由の往來を妨げる魔物のやうであつた。

さう斯うしてゐるうちに、私は又奥さんと差向ひで話しをしなければならぬ時機が來た。その頃は日の詰つて行くせはしない秋に、誰も注意を惹かれる肌寒の季節であつた。先生の附近で盜難に罹つたものが二三日續いて出た。盜難はいづれも宵の口であつた。大したものを持つて行かれた家は殆どなかつたけれども、這入られた所では必ず何か取られた。奥さんは氣味をわるくした。そこへ先生がある晩家を空けなければならぬ事情が出來てきた。先生と同郷の友人で地方の病院に奉職してゐるものが上京したため、先生は外の二三名と共に、ある所で其友人に飯を喰はせなければならなくなつた。

先生は譯を話して、私に歸つてくる間迄の留守番を頼んだ。私はすぐ引受けた。

十六

私の行つたのはまだ灯の點くか點かない暮方であつたが、几帳面な先生はもう宅うちになかつた。『時間に後れると悪いつて、つい今しがた出掛けました』と云つた奥さんは、私を先生の書齋へ案内した。

書齋には洋机テーブルと椅子の外に、澤山の書物が美しい脊皮を並べて、硝子越に電燈の光で照らされてゐた。奥さんは火鉢の前に敷いた座蒲團の上へ私を坐らせて、『ちつと其處いらにある本でも読んでゐて下さい』と斷つて出て行つた。私は丁度主人の歸りを待ち受ける客のやうな氣がして濟まなかつた。私は畏まつた儘煙草を飲んでゐた。奥さんが茶の間で何か下女に話してゐる聲が聞えた。書齋は茶の間の縁側を突き當つて折れ曲つた

角にあるので、棟の位置からいふと、座敷よりも却つて掛け離れた靜かさを領してゐた。一しきりで奥さんの話聲が已むと、後はしんとした。私は泥棒を待受ける様な心持で、凝まどとしながら氣を何處かに配つた。

三十分程すると、奥さんが又書齋の入口へ顔を出した。『おや』と云つて、軽く驚いた時の眼を私に向けた。さうして客に來た人のやうに鹿爪らしく控へてゐる私を可笑しさうに見た。

『それぢや窮屈きんくつでせう』

『いえ、窮屈きんくつぢやありません』

『でも退屈たいくつでせう』

『いいえ。泥棒が來るかと思つて緊張してゐるから退屈たいくつでもありません』

奥さんは手に紅茶茶碗を持つた儘、笑ひながら其處に立つてゐた。

『此處は隅つこだから番をするには好くありませんね』と私が云つた。

『ぢや失禮ですがもつと真中へ出て来て頂戴。御退屈だらうと思つて、御茶を入れて持つて来たんですが、茶の間で宜しければ彼方で上げますから』

私は奥さんの後に尾いて書齋を出た。茶の間には綺麗な長火鉢に鐵瓶が鳴つてゐた。私は其處で茶と菓子かしの御馳走になつた。奥さんは寢られないと不可いけないといつて、茶椀に手を觸れなかつた。

『先生は矢つ張り時々斯んな會へ御出掛けになるんですか』

『いいえ滅多に出た事はありません。近頃は段段人の顔を見るのが嫌ひになるやうです』
斯ういつた奥さんの様子に、別段困つたものだといふ風も見えなかつたので、私はつい大膽になつた。

『それぢや奥さん丈が例外なんですか』

『いいえ私も嫌はれてゐる一人なんです』

『そりや嘘です』と私が云つた。『奥さん自身嘘と知りながら左右仰しやるんでせう』
『何故』

『私に云はせると、奥さんが好きになつたから世間が嫌ひになるんですもの』

『あなたは學問をする方丈あつて、中中御上手ね。空からつほな理窟りくつを使ひこなす事が。世の中が嫌ひになつたから、私迄も嫌ひになつたんだとも云はれるぢやありませんか。それと同じ理窟りくつで』

『兩方とも云はれる事は云はれますが、此場合は私の方が正しいのです』

『議論はいやよ。よく男の方は議論だけなさるのね、面白さうに。空の盃さきでよくああ飽きずに獻酬けんじゆが出来ると思ひますわ』

奥さんの言葉は少し手痛てびかつた。然し其言葉の耳觸みみさわりからいふと、決して猛烈なもの

ではなかつた。自分に頭腦のある事を相手に認めさせて、そこに一種の誇りを見出す程に奥さんは現代的でなかつた。奥さんはそれよりもつと底の方に沈んだ心を大事にしてゐるらしく見えた。

十七

私はまだ其後にいふべき事を有つてゐた。けれども奥さんから徒らに議論を仕掛ける男のやうに取られては困ると思つて遠慮した。奥さんは飲み干した紅茶茶碗の底を覗いて黙つてゐる私を外らさないやうに、『もう一杯上げませうか』と聞いた。私はすぐ茶碗を奥さんの手に渡した。

『いくつ？一つ？二つ？』

妙なもので角砂糖を撮み上げた奥さんは、私の顔を見て、茶碗の中へ入れる砂糖の數

を聞いた。奥さんの態度は私に媚びるといふ程ではなかつたけれども、先刻の強い言葉を力めて打ち消さうとする愛嬌に充ちてゐた。

私は黙つて茶を飲んだ。飲んでしまつても黙つてゐた。

『あなた大變黙り込んだちまつたのね』と奥さんが云つた。

『何かいふと又議論を仕掛けるなんて、叱り附けられさうですから』と私は答へた。

『まさか』と奥さんが再び云つた。

二人はそれを緒口に又話を始めた。さうして又二人に共通な興味のある先生を問題にした。

『奥さん、先刻の續きをもう少し云はせて下さいませんか。奥さんには空な理窟と聞えるかも知れませんが、私はそんな上の空で云つてゐる事ぢやないんだから』

『ぢや仰しやい』

『今奥さんが急に居なくなつたとしたら、先生は現在の通りで生きてゐられるでせうか』
 『そりや分らないわ、あなた。そんな事、先生に聞いて見るより外に仕方がないぢやありませんか。私の所へ持つて来る問題ぢやないわ』

『奥さん、私は眞面目ですよ。だから逃げちや可けません。正直に答へなくつちや』

『正直よ。正直に云つて私には分らないのよ』

『ぢや奥さんは先生を何の位愛してゐらつしやるんですか。これは先生に聞くより寧ろ奥さんに伺つていい質問ですから、あなたに伺ひます』

『何もそんな事を聞き直つて聞かなくつても好いぢやありませんか』

『眞面目腐つて聞くがものはない。分り切つてると仰しやるんですか』

『まあ左右よ』

『その位先生に忠實なあなたが急に居なくなつたら、先生は何うなるんでせう。世の中

の何方どっちを向いても面白さうでない先生は、あなたが急にゐなくなつたら後で何うなるでせう。先生から見てぢやない。あなたから見てですよ。あなたから見て、先生は幸福になるでせうか、不幸になるでせうか』

『そりや私から見れば分つてゐます（先生はさう思つてゐないかも知れませんが）。先生は私を離れば不幸になる丈です。或は生きてゐられないかも知れませんが。さういふと、己惚うねほれになるやうですが、私は今先生を人間として出来る丈幸福にしてゐるんだと信じてゐますわ。どんな人があつても私程先生を幸福にできるものはないと迄思ひ込んでゐますわ。それだから斯うして落ち附いてゐられるんです』

『その信念が先生の心に好く映る筈だと私は思ひますが』

『それは別問題ですわ』

『矢つ張り先生から嫌はれてゐると仰しやるんですか』

「私は嫌はれてると思ひません。嫌はれる譯がないんですもの。然し先生は世間が嫌ひなんでせう。世間といふより近頃では人間が嫌ひになつてゐるんでせう。だから其人間の一人として、私も好かれる筈がないぢやありませんか」

奥さんの嫌はれるといふ意味がやつと私に呑み込めた。

十八

私は奥さんの理解力に感心した。奥さんの態度が舊式の日本の女らしくない所も私の注意に一種の刺戟を與へた。それで奥さんは其頃流行り始めた所謂新しい言葉などは殆ど使はなかつた。

私は女といふものに深い交際をした経験のない迂濶な青年であつた。男としての私は、異性に對する本能から、憧憬の目的物として常に女を夢みてゐた。けれどもそれは懐し

い春の雲を眺めるやうな心持で、ただ漠然と夢みてゐたに過ぎなかつた。だから實際の女の前へ出ると、私の感情が突然變る事が時々あつた。私は自分の前に現はれた女のために引き附けられる代りに、其場に臨んで却つて變な反撥力を感じた。奥さんに對した私にはそんな氣が丸で出なかつた。普通男女の間に横たはる思想の不平均といふ考へも殆ど起らなかつた。私は奥さんの女であるといふ事を忘れた。私はただ誠實なる先生の批評家及び同情家として奥さんを眺めた。

「奥さん、私が此前何故先生が世間的にもつと活動なさらないのであらうと云つて、あなたに聞いた時に、あなたは仰しやつた事がありますね、元はあぢやなかつたんだつて」

「ええ云ひました。實際彼んなぢやなかつたんですもの」

「何んなだつたんですか」

「あなたの希望なさるやうな、又私の希望するやうな頼もしい人だつたんです」

『それが何うして急に變化なすつたんですか』

『急にぢやありません、段段あなつて來たのよ』

『奥さんは其間始終先生と一所にゐらしたんでせう』

『無論りましたわ。夫婦ですもの』

『ぢや先生が左右變つて行かれる原因がちやんと解るべき筈ですがね』

『それだから困るのよ。あなたから左右云はれると實に辛いんですが、私には何う考へても、考へやうがないんですもの。私は今迄何遍あの人に、何うぞ打ち明けて下さいつて頼んで見たか分りやしません』

『先生は何と仰しやるんですか』

『何も云ふ事はない、何も心配する事はない、おれは斯ういふ性質になつたんだからと云ふ丈で、取り合つて呉れないんです』

私は黙つてゐた。奥さんも言葉を途切らした。下女部屋にゐる下女はことりとも音をさせなかつた。私は丸で泥棒の事を忘れて仕舞つた。

『あなたは私に責任があるんだと思つてやしませんか』と突然奥さんが聞いた。

『いいえ』と私が答へた。

『何うぞ隠さずに云つて下さい。さう思はれるのは身を切られるより辛いんだから』と奥さんが又云つた。『これでも私は先生のために出来る丈の事はしてゐる積なんです』

『そりや先生も左右認めてゐられるんだから、大丈夫です。御安心なさい、私が保証します』

奥さんは火鉢の灰を掻き馴らした。それから水注の水を鐵瓶に注した。鐵瓶は忽ち鳴りを沈めた。

『私はとうとう辛抱し切れなくなつて、先生に聞きました。私に悪い所があるなら遠慮

なく云つて下さい、改められる缺點なら改めるからつて。すると先生は、御前に缺點な
んかありやしない、缺點はおれの方にある丈だと云ふんです。さう云はれると、私悲し
くなつて仕様がないうんです、涙が出て猶の事自分の悪い所が聞きたくなるんです』
奥さんは眼の中に涙を一抔溜めた。

十九

始め私は理解のある女性として奥さんに對してゐた。私が其氣で話してゐるうちに、
奥さんの様子が次第に變つて來た。奥さんは私の頭腦に訴へる代りに、私の心臓を動か
し始めた。自分と夫の間には何の蟠りもない、又ない筈であるのに、矢張り何かある。
それだのに眼を開けて見極めようとすると、矢張り何も無い。奥さんの苦にする要點は
此處にあつた。

奥さんは最初世の中を見る先生の眼が厭世的だから、其結果として自分も嫌はれてゐ
るのだと斷言した。さう斷言して置きながら、ちつとも其處に落ち附いてゐられなかつ
た。底を割ると、却つて其逆を考へてゐた。先生は自分を嫌ふ結果、とうとう世の中迄
厭になつたのだらうと推測してゐた。けれども何う骨を折つても、其推測を突き留めて
事實とする事が出来なかつた。先生の態度は何處迄も良人らしかつた。親切で優しかつ
た。疑ひの塊りを其日其日の情合で包んで、そつと胸の奥に仕舞つて置いた奥さんは、
其晩その包みの中を私の前で開けて見せた。

『あなた何う思つて?』と聞いた。

『私からあなつたのか、それともあなたのいふ人世觀とか何とかいふものから、ああ
なつたのか。隠さず云つて頂戴』

私は何も隠す氣はなかつた。けれども私の知らないあるものが其處に存在してゐると

すれば、私の答が何であらうと、それが奥さんを満足させる筈がなかつた。さうして私は其處に私の知らないあるものがあると信じてゐた。

『私には解りません』

奥さんは豫期の外れた時に見る憐れな表情を其咄嗟に現はした。私はすぐ私の言葉を繼ぎ足した。

『然し先生が奥さんを嫌つてゐらつしやらない事丈は保證します。私は先生自身の口から聞いた通りを奥さんに傳へる丈です。先生は嘘を吐かない方でせう』

奥さんは何とも答へなかつた。しばらくしてから斯う云つた。

『實は私すこし思ひ中^{あた}る事があるんですけれども……』

『先生がああ云ふ風になつた原因に就いてですか』

『ええ。もしそれが原因だとすれば、私の責任丈はなくなるんだから、夫丈でも私大變

樂になれるんですが……』

『何んな事ですか』

奥さんは云ひ漚つて膝の上に置いた自分の手を眺めてゐた。

『あなた判断して下すつて、云ふから』

『私に出来る判断なら遣ります』

『みんなは云へないのよ。みんな云ふと叱られるから。叱られない所丈よ』

私は緊張して唾液^{つばき}を呑み込んだ。

『先生がまだ大學に居る時分、大變仲の好い御友達が一人あつたのよ。其方が丁度卒業する少し前に死んだんです。急に死んだんです』

奥さんは私の耳に私語^{ささや}くやうな小さな聲で、『實は變死したんです』と云つた。それは『何うして』と聞き返さずにはゐられない様な云ひ方であつた。

『それつ切りしか云へないのよ。けれども其事があつてから後なんです。先生の性質が段變つて來たのは。何故其方が死んだのか、私には解らないの。先生にも恐らく解つてゐないでせう。けれども夫から先生が變つて來たと思へば、さう思はれない事もないのよ』

『其人の墓ですか、雜司ヶ谷にあるのは』

『それも云はない事になつてゐるから云ひません。然し人間は親友を一人亡くした丈で、そんなに變化できるものでせうか。私はそれが知りたくつて堪らないんです。だから其處を一つ貴方に判断して頂きたいと思ふの』

私の判断は寧ろ否定の方に傾いてゐた。

二十

私は私のつらまへた事實の許す限り奥さんを慰めようとした。奥さんも亦出来る丈私

によつて慰められたさうに見えた。それで二人は同じ問題をいつまでも話し合つた。けれども私はもともと事の大根を攫おぼんでゐなかつた。奥さんの不安も實は其處に漂ふ薄い雲に似た疑惑から出て來てゐた。事件の真相になると、奥さん自身にも多くは知れてゐなかつた。知れてゐる所でも悉皆は私に話す事が出来なかつた。従つて慰める私も、慰められる奥さんも、共に波に浮いて、ゆらゆらしてゐた。ゆらゆらしながら、奥さんは何處迄も手を出して、覺束ない私の判断に縋り附かうとした。

十時頃になつて先生の靴の音が玄關に聞えた時、奥さんは急に今迄の凡てを忘れたやうに、前に坐つてゐる私を其方退そちけにして立ち上つた。さうして格子を開ける先生を殆ど出合頭に迎へた。私は取り残されながら、後から奥さんに尾いて行つた。下女丈は假うた寝でもしてゐたと見えて、つひに出て來なかつた。

先生は寧ろ機嫌がよかつた。然し奥さんの調子は更によかつた。今しがた奥さんの美

しい眼のうちに溜つた涙の光と、それから黒い眉毛の根に寄せられた八の字を記憶してゐた私は、其變化を異常なものとして注意深く眺めた。もしそれが詐りでなかつたならば、(實際夫は詐りとは思へなかつたが)今迄の奥さんの訴へは感傷センチメントを玩ぶためにとくに私を相手に拵へた、徒らな女性の遊戯と取れない事もなかつた。尤も其時の私には奥さんをそれ程批評的に見る氣は起らなかつた。私は奥さんの態度の急に輝いて來たのを見て寧ろ安心した。是ならばさう心配する必要もなかつたんだと考へ直した。

先生は笑ひながら『どうも御苦勞さま、泥棒は來ませんでしたか』と私に聞いた。それから『來ないんで張合ひが抜けやしませんか』と云つた。

歸る時、奥さんは『どうも御氣の毒さま』と會釋した。其調子は忙しい處を暇を潰させて氣の毒だといふよりも、折角來たのに泥棒が這入らなくつて氣の毒だといふ冗談のやうに聞えた。奥さんはさう云ひながら、先刻出した西洋菓子の残りを、紙に包んで私

の手に持たせた。私はそれを袂へ入れて、人通りの少い夜寒の小路を曲折して賑やかな町の方へ急いだ。

私は其晩の事を記憶のうちから引き抜いて此處へ詳しく書いた。是は書く丈の必要があるから書いたのだが、實をいふと、奥さんに菓子を買つて歸るときは氣分では、それ程當夜の會話を重く見てゐなかつた。私は其翌日午飯ひるめしを食ひに學校から歸つてきて、昨夜机の上に載せて置いた菓子の包みを見ると、すぐ其中からチョコレートを塗つた鳶色のカステラを出して頬張ほはつた。さうしてそれを食ふ時に、必竟此菓子を私に呉れた二人の男女は、幸福な一對として世の中に存在してゐるのだと自覺しつつ味はつた。

秋が暮れて冬が來る迄格別の事もなかつた。私は先生の宅うちへ出這りをする序に、衣服の洗ひ張りや仕立方などを奥さんに頼んだ。それ迄襦袢といふものを著た事のない私が、シャツの上に黒い襟のかかつたものを重ねるやうになつたのは此時からであつた。

子供のない奥さんは、さういふ世話を焼くのが却つて退屈凌ぎになつて、結句身體からだの藥だ位の事を云つてゐた。

『こりや手織ね。こんな地の好い著物は今迄縫つた事がないわ。其代り縫ひ縫悪いのよそりあ。丸で針が立たないんですもの。御蔭で針を二本折りましたわ』
斯んな苦情をいふ時ですら、奥さんは別に面倒臭いといふ顔をしなかつた。

二十一

冬が来た時、私は偶然國へ歸らなければならぬ事になつた。私の母から受取つた手紙の中に、父の病氣の経過が面白くない様子を書いて、今が今といふ心配もあるまいが、年が年だから出来るなら都合して歸つて来てくれと頼むやうに附け足してあつた。

父はかねてから腎臓を病んでゐた。中年以後の人に屢見る通り、父の此病は慢性であ

つた。其代り要心さへしてゐれば急變のないものと當人も家族のものも信じて疑はなかつた。現に父は養生の御蔭一つで、今日迄こんにち何うか斯うか凌いで来たやうに客が來ると吹聴してゐた。其父が、母の書信によると、庭へ出て何かしてゐる機はまみに突然眼暈めまひがして引ッ繰り返つた。家内のものは輕症の腦溢血と思ひ違へて、すぐその手當をした。後で醫者から何うも左右さうではないらしい、矢張り持病の結果だらうといふ判断を得て、始めて卒倒と腎臓病とを結び附けて考へるやうになつたのである。

冬休みが來るにはまだ少し間があつた。私は學期の終り迄待つてゐても差支へあるまいと思つて一日二日其儘にして置いた。すると其一日二日の間に、父の寢てゐる様子だの、母の心配してゐる顔だのが時時眼に浮かんだ。そのたびに一種の心苦しさを嘗めた私は、とうとう歸る決心をした。國から旅費を送らせる手數と時間を省くため、私は暇乞かたがた先生の所へ行つて、要る丈の金を一時立て替へてもらふ事にした。

先生は少し風邪の氣味で、座敷へ出るのが億劫だといつて、私をその書齋に通した。書齋の硝子戸から冬に入つて稀に見るやうな懐かしい和かな日光が机掛の上に射してゐた。先生は此日あたりの好い室の中へ大きな鉢を置いて、五徳の上に懸けた金盥から立ち上る湯氣で、呼吸の苦しくなるのを防いでゐた。

『大病は好いが、ちよつとした風邪などは却つて厭なものですね』と云つた先生は苦笑しながら私の顔を見た。

先生は病氣といふ病氣をした事のない人であつた。先生の言葉を聞いた私は笑ひたくなつた。

『私は風邪位なら我慢しますが、それ以上の病氣は眞平です。先生だつて同じ事でせう。試に遣つて御覽になるとよく解ります』

『左右かね。私は病氣になる位なら、死病に罹りたいと思つてる』

私は先生のいふ事に格別注意を拂はなかつた。すぐ母の手紙の話をして、金の無心を申し出た。

『そりや困るでせう。其位なら今手元にある筈だから持つて行き玉へ』

先生は奥さんを呼んで必要の金額を私の前に竝べさせて呉れた。それを奥の茶籠笥か何かの抽斗から出して來た奥さんは白い半紙の上に鄭寧に重ねて『そりや御心配ですね』と云つた。

『何遍も卒倒したんですか』と先生が聞いた。

『手紙には何とも書いてありませんが。——そんなに何度も引ッ繰り返るものですか』

『ええ』

先生の奥さんの母親といふ人も私の父と同じ病氣で亡くなつたのだと云ふ事が始めて私に解つた。

『何うせ六づかしいんでせう』と私が云つた。
 『左右さね。私が代られれば代つて上げて好いが。——嘔氣はあるんですか』
 『何うですか、何とも書いてないから大方ないんでせう』
 『嘔氣さへ来なければまだ大丈夫ですよ』と奥さんが云つた。
 私は其晩の汽車で東京を立つた。

二十二

父の病氣は思つた程悪くはなかつた。それでも著いた時は、床の上に胡坐をかいて『みんな心配するから、まあ我慢して斯う凝としてゐる。なにももう起きて好いのさ』と云つた。然し其翌日からは母が止めるのも聞かずに、とうとう床を上げさせて仕舞つた。母は不承無精に太織の蒲團を疊みながら、『御父さんは御前が歸つて來たので、急に氣が

強くおなりなんだよ』と云つた。私には父の舉動がさして虚勢を張つてゐるやうにも思へなかつた。

私の兄はある職を帯びて遠い九州にゐた。是は萬一の事がある場合でなければ、容易に父母の顔を見る自由の利かない男であつた。妹は他國へ嫁いだ。是も急場の間に合ふ様に、おいそれと呼寄せられる女ではなかつた。兄妹三人のうちで、一番便利なのは矢張り書生をしてゐる私丈であつた。其私が母の云ひ附け通り學校の課業を放り出して、休み前に歸つて來たといふ事が、父には大きな満足であつた。

『是しきの病氣に學校を休ませては氣の毒だ。御母さんがあまり仰山な手紙を書くものだから不可』

父は口では斯う云つた。斯ういつた計りでなく、今迄敷いてゐた床を上げさせて、何時ものやうな元氣を示した。

『あんまり輕はずみをして逆回すと可けませんよ』

私の此注意を父は愉快さうに然し極めて軽く受けた。

『なに大丈夫、是で何時もの様に要心さへしてゐれば』

實際父は大丈夫らしかつた。家の中を自由に往來して、息も切れなければ、眩暈めまひも感じなかつた。ただ顔色丈は普通の人よりも大變悪かつたが、是は又今始まつた症状でもないので、私達は格別それを氣に留めなかつた。

私は先生に手紙を書いて恩借の禮を述べた。正月上京する時に持參するからそれ迄待つてくれる様にと斷つた。さうして父の病狀の思つた程險惡でない事、此分なら當分安心な事、眩暈も嘔氣も皆無な事などを書き連らねた。最後に先生の風邪に就いても一言の見舞を附け加へた。私は先生の風邪を實際軽く見てゐたので。

私は其手紙を出す時に決して先生の返事を豫期してゐなかつた。出した後で父や母と

先生の噂などをしながら、遙に先生の書齋を想像した。

『こんど東京へ行くときには椎茸でも持つて行つて御上げ』

『ええ、然し先生が干した椎茸などを食ふかしら』

『旨くはないが、別に嫌ひな人もないだらう』

私には椎茸と先生を結び附けて考へるのが變であつた。

先生の返事が來た時、私は一寸驚かされた。ことにその内容が特別の用件を含んでゐなかつた時、驚かされた。先生はただ親切づくで、返事を書いてくれたんだと私は思つた。さう思ふと、その簡単な一本の手紙が私には大層な喜びになつた。尤も是は私が先生から受取つた第一の手紙には相違なかつたが。

第一といふと私と先生の間に書信の往復がたびたびあつたやうに思はれるから、事實は決してさうでない事を一寸斷つて置きたい。私は先生の生前にたつた二通の手紙しか

貫つてゐない。其一通は今いふ此簡単な返書で、あとの一通は先生の死ぬ前とくに私宛で書いた大變長いものである。

父は病氣の性質として、運動を慎まなければならぬので、床を上げてからも、殆ど戶外へは出なかつた。一度天氣のごく穏かな日の午後庭へ下りた事があるが、其時は萬一を氣遣つて、私が引き添ふやうに傍に附いてゐた。私が心配して自分の肩へ手を掛けさせようとしても、父は笑つて應じなかつた。

二十三

私は退屈な父の相手としてよく將棋盤に向つた。二人とも無精な性質なので、炬燵にあつた儘、盤を櫓の上へ載せて、駒を動かすたびに、わざわざ手を掛蒲團の下から出すやうな事をした。時々持駒を失くして、次の勝負の來る迄双方とも知らずにゐたりし

た。それを母が灰の中から見附け出して、火箸で挟み上げるといふ滑稽もあつた。

『碁だと盤が高過ぎる上に、足が著いてゐるから、炬燵の上では打てないが、其處へ來ると將棋盤は好いね、斯うして樂に差せるから。無精者には持つて來いだ、もう一番遣らう』

父は勝つた時は必ずもう一番遣らうと云つた。其辭負けた時にも、もう一番遣らうと云つた。要するに、勝つても負けても、炬燵にあつて、將棋を差したがる男であつた。始めのうちは珍らしいので、此隠居じみた娛樂が私にも相當の興味を興へたが、少し時日が経つに伴れて、若い私の氣力は其位な刺戟で満足出來なくなつた。私は金や香車を握つた拳を頭の上へ伸ばして、時々思ひ切つたあくびをした。

私は東京の事を考へた。さうして漲る心臓の血潮の奥に、活動活動と打ちつづける鼓動を聞いた。不思議にも其鼓動の音が、ある微妙な意識状態から、先生の力で強められ

てゐるやうに感じた。

私は心のうちで、父と先生とを比較して見た。兩方とも世間から見れば、生きてゐるか死んでゐるか分らない程大人しい男であつた。他に認められるといふ點からいへば何方も零であつた。それでゐて、此將棋を差したがる父は、單なる娛樂の相手としても私には物足りなかつた。かつて遊興のために往來をした覺えのない先生は、歡樂の交際から出る親しみ以上に何時か私の頭に影響を與へてゐた。ただ頭といふのはあまりに冷か過ぎるから私は胸と云ひ直したい。肉のなかに先生の力が喰ひ込んでゐると云つても、血のなかに先生の命が流れてゐると云つても、其時の私には少しも誇張でないやうに思はれた。私は父が私の本當の父であり、先生は又いふ迄もなく、あかの他人であるといふ明白な事實を、ことさらに眼の前に並べて見て、始めて大きな眞理でも發見したかの如くに驚いた。

私がつそつし出すと前後して、父や母の眼にも今迄珍らしかつた私が段段陳腐になつて來た。是は夏休みなどに國へ歸る誰でもが一樣に經驗する心持だらうと思ふが、當座の一週間位は下にも置かないやうに、ちやほや歡待されるのに其峠を定規通り通り越すと、あとはそろそろ家族の熱が冷めて來て、仕舞には有つても無くつても構はないもののやうに粗末に取扱はれ勝ちになるものである。私も、滯在中に其峠を通り越した。其上私は國へ歸るたびに、父にも母にも解らない變な所を東京から持つて歸つた。昔でいふと、儒者の家へ切支丹の臭ひを持ち込むやうに、私の持つて歸るものは父とも母とも調和しなかつた。無論私はそれを隠してゐた。けれども元元身に著いてゐるものだから、出すまいと思つても、何時かそれが父や母の眼に留つた。私はつひ面白くなかつて、早く東京へ歸りたくなつた。

父の病氣は幸ひ現状維持の儘で、少しも悪い方へ進む模様は見えなかつた。念の爲に

わざわざ遠くから相當の醫者を招いたりして、慎重に診察して貰つても矢張り私の知つてゐる以外に異状は認められなかつた。私は冬休みの盡きる少し前に國を立つ事にした。立つと云ひ出すと、人情は妙なもので、父も母も反對した。

『もう歸るのかい、まだ早いぢやないか』と母が云つた。

『まだ四五日居ても間に合ふんだらう』と父が云つた。

私は自分の極めた出立の日を動かさなかつた。

二十四

東京へ歸つて見ると松飾はいつか取拂はれてゐた。町は寒い風の吹くに任せて、何處を見ても是といふ程の正月めいた景氣はなかつた。

私は早速先生のうちへ金を返しに行つた。例の椎茸も序に持つて行つた。ただ出すの

は少し變だから、母が是を差上げて呉れといひましたとわざわざ斷つて奥さんの前へ置いた。椎茸は新しい菓子折に入れてあつた。鄭寧に禮を述べた奥さんは、次の間へ立つ時、其折を持つて見て、軽いのに驚かされたのか『こりや何の御菓子』と聞いた。奥さんは懇意になると、斯んな所に極めて淡泊な子供らしい心を見せた。

二人とも父の病氣について、色色の懸念の問を繰返してくれた中に、先生は斯んな事をいつた。

『成程容體を聞くと、今が今何うといふ事もないやうですが、病氣が病氣だから餘程氣をつけないと可けません』

先生は腎臓の病に就いて私の知らない事を多く知つてゐた。

『自分で病氣に罹つてゐながら、氣が附かないで平氣であるのがあの病の特色です。私の知つたある士官は、とうとうそれで遣られたが、全く嘘のやうな死に方をしたんです

よ。何しろ傍そばに寝てゐた細君が看病をする暇もなんにもない位なんですからね。夜中よなかに一寸苦しいと云つて、細君を起したぎり、翌くる朝はもう死んでゐたんです。しかも細君は夫が寝てゐるとばかり思つてたんだつて云ふんだから』

今迄樂天的に傾いてゐた私は急に不安になつた。

『私の父もそんなになるでせうか。ならんとも云へないですね』

『醫者は何と云ふのです』

『醫者は到底治とちらないといふんです。けれども當分の所心配はあるまいともいふんです』
『夫ぢや好いでせう。醫者が左右さういふなら。私の今話したのは氣が附かずつにゐた人の事で、しかもそれが随分亂暴な軍人なんだから』

私は稍安心した。私の變化を凝と見てゐた先生は、それから斯う附け足した。

『然し人間は健康にしる病氣にしる、どつちにしても脆いものですね。いつ何んな事で

何んな死にやうをしないとも限らないから』

『先生もそんな事を考へて御出でですか』

『いくら丈夫の私でも、滿更考へない事ありません』

先生の口元には微笑の影が見えた。

『よくころりと死ぬ人があるぢやありませんか。自然に。それからあつと思ふ間に死ぬ人もあるでせう。不自然な暴力で』

『不自然な暴力つて何ですか』

『何だかそれは私にも解らないが、自殺する人はみんな不自然な暴力を使ふんでせう』

『すると殺されるのも、やはり不自然な暴力の御蔭ですね』

『殺される方はちつとも考へてゐなかつた。成程左右さういへば左右だ』

其日はそれで歸つた。歸つてからも父の病氣の事はそれ程苦にならなかつた。先生の

いつた自然に死ぬとか不自然の暴力で死ぬとかいふ言葉も、其場限りの浅い印象を與へた丈で、後は何等のこだはりを私の頭に残さなかつた。私は今迄幾度か手を著けようとして手をつつ込めた卒業論文を、愈本式に書き始めなければならぬと思ひ出した。

二十五

其年の六月に卒業する筈の私は、是非共此論文を成規通り四月一杯に書上げて仕舞はなければならなかつた。二、三、四と指を折つて餘る時日を勘定して見た時、私は少し自分の度胸を疑つた。他のものは餘程前から材料を蒐めたり、ノート（ほが）を溜めたりして、餘所目（よそめ）にも忙しさうに見えるのに、私丈はまだ何も手（なんじ）を著けず（なんじ）にゐた。私にはただ年が改まつたら大いに遣らうといふ決心丈があつた。私は其決心で遣り出した。さうして忽ち動けなくなつた。今迄大きな問題を空（くう）に描いて、骨組丈は略出来上つてゐる位に考へ

てゐた私は、頭を抑へて悩み始めた。私はそれから論文の問題を小さくした。さうして練上げた思想を系統的に纏める手数を省くために、ただ書物の中にある材料を並べて、それに相當な結論を一寸附け加へる事にした。

私の選擇した問題は先生の専門と縁故の近いものであつた。私がかつてその選擇に就いて先生の意見を尋ねた時、先生は好いでせうと云つた。狼狽した氣味の私は、早速先生の所へ出掛けて、私の讀まなければならぬ参考書を聞いた。先生は自分の知つてゐる限りの知識を、快く私に與へて呉れた上に、必要の書物を二三冊貸さうと云つた。然し先生は此點について毫も私を指導する任に當らうとしなかつた。

『近頃はあんまり書物を讀まないから、新しい事は知りませんよ。學校の先生に聞いた方が好いでせう』

先生は一時非常の讀書家であつたが、其後何ういふ譯か、前程此方面に興味が働かな

くなつたやうだと、かつて奥さんから聞いた事があるのを、私は其時不圖思ひ出した。私は論文を餘所にして、そぞろに口を開いた。

『先生は何故元のやうに書物に興味を有ち得ないんですか』

『何故といふ譯もありませんが。……つまり幾何本を讀んでもそれ程えらくならないと思ふ所爲でせう。それから……』

『それから、未だあるんですか』

『まだあるといふ程の理由でもないが、以前はね、人の前へ出たり、人に聞かれたりして知らない恥のやうに極りが悪かつたものだが、近頃は知らないといふ事が、それ程の恥でないやうに見え出したものだから、つひ無理にも本を讀んで見ようといふ元氣が出なくなつたのでせう。まあ早く云へば老い込んだのです』

先生の言葉は寧ろ平靜であつた。世間に脊中を向けた人の苦味を帯びてゐなかつた丈

に、私にはそれ程の手應もなかつた。私は先生を老い込んだとも思はない代りに、偉いとも感心せず歸つた。

それからの私は殆ど論文に崇られた精神病者の様に眼を赤くして苦しんだ。私は一年前に卒業した友達に就いて、色色な様子を聞いて見たりした。そのうちの一人は締切の日に車で事務所へ驅けつけて漸く間に合はせたと云つた。他の一人は五時を十五分程後らして持つて行つたため、危く跳ね附けられようとした所を、主任教授の好意でやつと受理して貰つたと云つた。私は不安を感ずると共に度胸を据ゑた。毎日机の前で精根のつづく限り働いた。でなければ、薄暗い書庫に這入つて、高い本棚のあちらこちらを見廻した。私の眼は好事家が骨董でも掘り出す時のやうに脊表紙の金文字をあさつた。

梅が咲くにつけて寒い風は段段向きを南へ更へて行つた。それが一仕切り經つと、櫻の噂がちらほら私の耳に聞え出した。それでも私は馬車馬のやうに正面計り見て論文に

鞭たれた。私はつひに四月の下旬が来て、やつと豫定通りのものを書き上げる迄、先生の敷居を跨がなかつた。

二十六

私の自由になつたのは、八重櫻の散つた枝にいつしか青い葉が霞むやうに伸び始める初夏の季節であつた。私は籠を抜け出した小鳥の心をもつて、廣い天地を一目に見渡しながら、自由に羽搏きをした。私はすぐ先生の家へ行つた。枳殻の垣が黒ずんだ枝の上に、萌るやうな芽を吹いてゐたり、石榴の枯れた幹から、つやつやしい茶褐色の葉が、柔かさうに日光を映してゐたりするのが、道道私の眼を引き附けた。私は生れて始めてそんなものを見るやうな珍らしさを感じた。

先生は嬉しさうな私の顔を見て、『もう論文は片附いたんですか、結構ですね』といつ

た。私は『御蔭で漸く濟みました。もう何もする事はありません』と云つた。

實際其時の私は、自分のなすべき凡ての仕事が既に終了して、是から先は威張つて遊んで居ても構はないやうな晴れやかな心持でゐた。私は書き上げた自分の論文に對して十分の自信と満足を有つてゐた。私は先生の前で、しきりに其内容を喋喋した。先生は何時もの調子で、『成程』とか、『左右ですか』とか云つてくれたが、それ以上の批評は少しも加へなかつた。私は物足りないといふよりも、聊か拍子抜けの氣味であつた。それでも其日私の氣力は、因循らしく見える先生の態度に逆襲を試る程に生生してゐた。私は青く蘇生らうとする大きな自然の中に、先生を誘ひ出さうとした。

『先生何處かへ散歩しませう。外へ出ると大變好い心持です』

『何處へ』

私は何處でも構はなかつた。ただ先生を伴れて郊外へ出たかつた。

一時間の後、先生と私は目的通り市を離れて、村とも町とも區別の附かない靜かな所を宛てもなく歩いた。私はかなめの垣から若い柔かい葉を撈ぎ取つて芝笛を鳴らした。ある鹿兒島人を友達にもつて、その人の眞似をしつつ自然に習ひ覺えた私は、此芝笛といふものを鳴らす事が上手であつた。私が得意にそれを吹きつづけると、先生は知らん顔をして餘所を向いて歩いた。

やがて若葉に鎖されたやうに蒼鬱こんもりした小高い一構への下に細い路が開けた。門の柱に打ち附けた標札に何何園とあるので、その個人の邸宅でない事がすぐ知れた。先生はだらだら上りになつてゐる入口を眺めて、『這入つて見ようか』と云つた。私はすぐ『植木屋です』と答へた。

植込みの中をうねりして奥へ上ると左側に家うちがあつた。明け放つた障子の内はがらんとして人の影も見えなかつた。ただ軒先に据ゑた大きな鉢の中に飼つてある金魚が動

いてゐた。

『靜かだね。斷らずに這入つても構はないだらうか』

『構はないでせう』

二人は又奥の方へ進んだ。然しそこにも人影は見えなかつた。躑躅が燃えるやうに咲き亂れてゐた。先生はそのうちで樺色の丈の高いのを指して、『是は霧島でせう』と云つた。

芍薬しやくやくも十坪あまり一面に植附けられてゐたが、まだ季節が來ないので花を著けてゐるのは一本もなかつた。此芍薬島の傍そばにある古びた縁臺のやうなものの上に先生は大の字なりに寝た。私は其餘つた端の方に腰を卸して煙草を吹かした。先生は蒼い透き徹るやうな空を見てゐた。私は私を包む青葉の色に心を奪はれてゐた。其若葉の色をよくよく眺めると、一一違つてゐた。同じ楓の樹でも同じ色を枝に著けてゐるものは一つもなかつた。細い杉苗の頂に投げ被かぶせてあつた先生の帽子が風に吹かれて落ちた。

私はすぐ其帽子を取り上げた。所所に著いてゐる赤土を爪で弾きながら先生を呼んだ。

『先生帽子が落ちました』

『ありがたう』

身體を半分起してそれを受取つた先生は、起きるとも寝るとも片附かない其姿勢の儘で、變な事を私に聞いた。

『突然だが、君の家には財産が餘程あるんですか』

『あるといふ程ありやしません』

『まあ何の位あるのかね。失禮の様だが』

『何の位つて、山と田地が少しある限りで、金なんか丸で無いんでせう』

先生が私の家の經濟に就いて、問らしい問を掛けたのはこれが始めてであつた。私の方はまだ先生の暮し向きに關して、何も聞いた事がなかつた。先生と知合ひになつた始め、私は先生が何うして遊んでゐられるかを疑ぐつた。其後も此疑ひは絶えず私の胸を去らなかつた。然し私はそんな露骨な問題を先生の前に持ち出すのをぶしつけと計り思つて何時でも控へてゐた。若葉の色で疲れた眼を休ませてゐた私の心は、偶然また其疑ひに觸れた。

『先生は何うなんです。何の位の財産を有つてゐらつしやるんですか』

『私は財産家と見えますか』

先生は平生から寧ろ質素な服装をしてゐた。それに家内は小人数であつた。従つて住宅も決して廣くはなかつた。けれども其生活の物質的に豊かな事は、内輪に這入り込まない私の眼にさへ明かであつた。要するに先生の暮しは贅澤とはいへない迄も、あたじけ

なく切り詰めた無弾力性のものではなかつた。

『左右でせう』と私が云つた。

『そりや其位の金はあるさ。けれども決して財産家ぢやありません。財産家ならもつと大きな家でも造るさ』

此時先生は起き上つて、縁臺の上に胡坐をかいてゐるが、斯う云ひ終ると、竹の杖の先で地面の上へ圓のやうなものを描き始めた。それが濟むと、今度はステツキを突き刺すやうに眞直に立てた。

『是でも元は財産家なんだがなあ』

先生の言葉は半分獨言のやうであつた。それですぐ後に尾いて行き損つた私は、つい黙つてゐた。

『是でも元は財産家なんですよ君』

と云ひ直した先生は、次に私の顔を見て微笑した。私はそれでも何とも答へなかつた。寧ろ不調法で答へられなかつたのである。すると先生が又問題を他へ移した。

『あなたの御父さんの病氣は其後何うなりました』

私は父の病氣に就いて正月以後何も知らなかつた。月月國から送つてくれる爲替と共に來る簡単な手紙は、例の通り父の手蹟であつたが、病氣の訴へはそのうちに殆ど見當らなかつた。其上書體も確であつた。此種の病人に見る顔へが少しも筆の運びを亂してゐなかつた。

『何とも云つて來ませんが、もう好いでせう』

『好ければ結構だが、病症が病症なんだからね』

『矢張り駄目ですかね。でも當分は持ち合つてゐるんでせう。何とも云つて來ませんよ』

『さうですか』

私は先生が私のうちの財産を聞いたり、私の父の病氣を尋ねたりするのを普通の談話―胸に浮かんだ儘を其通り口にする、普通の談話と思つて聞いてゐた。所が先生の言葉の底には兩方を結び附ける大きな意味があつた。先生自身の經驗を持たない私は無論其處に氣の附く筈がなかつた。

二十八

『君のうちに財産があるなら、今のうちに能く始末をつけて貰つて置かないと不可いと思ふがね、餘計な御世話だけれども。君の御父さんが達者なうちに、貰ふものはちやんと貰つて置くやうにしたら何うですか。萬一の事があつたあとで、一番面倒の起るのは財産の問題だから』

『ええ』

私は先生の言葉に大した注意を拂はなかつた。私の家庭でそんな心配をしてゐるものは、私に限らず、父にしろ母にしろ、一人もないと私は信じてゐた。其上先生のいふ事の、先生として、あまりに實際的なのに私は少し驚かされた。然し其處は年長者に對する平生の敬意が私を無口にした。

『あなたの御父さんが亡くなられるのを今から豫想して掛るやうな言葉遣ひをするのが氣に觸つたら許して呉れ給へ。然し人間は死ぬものだからね。何んなに達者なものでも、何時死ぬか分らないものだからね』

先生の口氣は珍しく苦苦しかつた。

『そんな事をちつとも氣に掛けちやるません』と私は辯解した。

『君の兄妹は何人でしたかね』と先生が聞いた。

先生は其上に私の家族の人数を聞いたり、親類の有無を尋ねたり、叔父や叔母の様子

を問ひなどした。さうして最後に斯ういつた。

『みんな好い人ですか』

『別に悪い人間といふ程のものもゐないやうです。大抵田舎者ですから』

『田舎者は何故悪くないんですか』

私は此追窮に苦しんだ。然し先生は私に返事を考へさせる餘裕さへ與へなかつた。

『田舎者は都會のものより却つて悪い位なものです。それから、君は今、君の親戚などの中に、是といつて、悪い人間はゐないやうだと云ひましたね。然し悪い人間といふ一種の人間が世の中にあると君は思つてゐるんですか。そんな鑄型いがたに入れたやうな悪人は世の中にある筈がありませんよ。平生はみんな善人なんです、少くともみんな普通の人間なんてす。それが、いざといふ間に、急に悪人に變るんだから恐いのです。だから油斷が出来ないんです』

先生のいふ事は、此處で切れる様子もなかつた。私は又此處で何か云はうとした。すると後の方で犬が急に吠え出した。先生も私も驚いて後を振り返つた。

縁臺の横から後部へ掛けて植附けてある杉苗の傍そばに、熊笹が三坪程地を隠すやうに茂つて生えてゐた。犬はその顔と脊を熊笹の上に現して、盛んに吠え立てた。そこへ十位の子供が馳けて来て犬を叱り附けた。子供は徽章の著いた黒い帽子を被つたまま先生の前へ廻つて禮をした。

『叔父さん、這入つて来る時、家に誰もゐなかつたかい』と聞いた。

『誰もゐなかつたよ』

『姉さんやおつかさんが勝手の方かたにゐたのに』

『さうか、ゐたのかい』

『ああ。叔父さん、今日こんにちはつて、斷つて這入つて来ると好かつたのに』

先生は苦笑して、懐中から囊口を出して、五錢の白銅を子供の手に握らせた。

『おつかさんに左右言つとくれ。少し此處で休まして下さい』

子供は伶俐さうな眼に笑ひを漲らして、首肯いて見せた。

『今斥候長になつてる所なんだよ』

子供は斯う断つて、躑躅の間を下の方へ驅け下りて行つた。犬も尻尾を高く巻いて子供の後を追ひ掛けた。しばらくすると同じ位の年恰好の子供が二三人、是も斥候長の下りて行つた方へ驅けて行つた。

二十九

先生の談話は、此犬と子供のために、結末迄進行する事が出来なくなつたので、私はつひに、其要領を得ないでしまつた。先生の氣にする財産云々の懸念は其時の私には全

くなかつた。私の性質として、又私の境遇からいつて、其時の私にはそんな利害の念に頭を悩ます餘地がなかつたのである。考へると是は私がまだ世間に出ない爲でもあり、又實際其場に臨まない爲でもあつたらうが、兎に角若い私には何故か金の問題が遠くの方に見えた。

先生の話のうちでただ一つ底迄聞きたかつたのは、人間がいざといふ間際に、誰でも悪人になるといふ言葉の意味であつた。單なる言葉としては、是丈でも私に解らない事はなかつた。然し私は此句に就いてもつと知りたかつた。

犬と子供が去つたあと、廣い若葉の園は再び故の静かさに歸つた。さうして我我は沈黙に鎖された人の様にしばらく動かずゐた。うるはしい空の色が其時次第に光を失つて來た。眼の前にある樹は大概楓であつたが、其枝に滴るやうに吹いた軽い緑の若葉が、段段暗くなつて行く様に思はれた。遠い往來を荷車を引いて行く響きがごろごろと聞え

た。私はそれを村の男が植木か何かを載せて縁日へでも出掛けるものと想像した。先生は其音を聞くと、急に瞑想から呼吸を吹き返した人のやうに立ち上つた。

『もう、徐徐そろそろ歸りませう。大分だいぶ日が永くなつたやうだが、矢張り斯う安閑としてゐるうちには、何時の間にか暮れて行くんだね』

先生の脊中には、さつき縁臺の上に仰向あふむきに寝た痕あとが一杯著いてゐた。私は両手でそれを拂ひ落した。

『ありがたう。脂やじがこびり著いてやしませんか』

『綺麗に落ちました』

『此羽織はつい此間拵へた計りなんだよ。だから無暗に汚して歸ると、妻に叱られるからね。有難う』

二人は又だらだら坂の中途にある家の前まへへ來た。這入る時には誰もゐる氣色の見えな

かつた縁に、お上さんが十五六の娘を相手に、絲卷へ絲を巻きつけてゐた。二人は多きな金魚鉢の横から、『どうも御邪魔をしました』と挨拶した。お上さんは『いいえ御構ひ申しも致しませんで』と禮を返した後、先刻さつき子供に遣つた白銅の禮を述べた。

門口を出て二三町來た時、私はつひに先生に向つて口を切つた。

『さき程先生の云はれた、人間は誰でもいざといふ間際に悪人になるんだといふ意味です。ね。あれは何ういふ意味ですか』

『意味といつて、深い意味もありません。——つまり事實なんです。理窟ぢやないんだ』

『事實で差支ありませんが、私の伺ひたいのは、いざといふ間際といふ意味なんです。一體何んな場合を指すのですか』

先生は笑ひ出した。恰も時機の過ぎた今、もう熱心に説明する張合ひがないと云つた風に。

『金さ君。金を見ると、どんな君子でもすぐ悪人になるのさ』

私には先生の返事があまりに平凡過ぎて詰らなかつた。先生が調子に乗らない如く、私も拍子抜けひやしなの氣味であつた。私は澄ましてさつさと歩き出した。いきほひ先生は少し後れ勝ちになつた。先生はあとから『おいおい』と聲を掛けた。

『そら見給へ』

『何をですか』

『君の氣分だつて、私の返事一つですぐ變るぢやないか』

待ち合はせるために振り向いて立ち留まつた私の顔を見て、先生は斯う云つた。

三十

其時の私は腹の中で先生を憎らしく思つた。肩を並べて歩き出してからも自分の聞き

たい事をわざと聞かずにゐた。しかし先生の方では、それに氣が附いてゐたのか、ゐないのか、丸で私の態度に拘泥こだはる様子を見せなかつた。いつもの通り沈黙がちに落附き拂つた歩調をすまして運んで行くので、私は少し業腹ごいばらになつた。何とかいつて一つ先生を遣つ附けて見たくなつて來た。

『先生』

『何ですか』

『先生はさつき少し昂奮きやうふんなさいましたね。あの植木屋の庭で休んでゐる時に。私は先生の昂奮きやうふんしたのを滅多に見た事がないんですが、今日は珍らしい所を拜見した様な氣がします』

先生はすぐ返事をしなかつた。私はそれを手應てこたへのあつたやうにも思つた。また的が外れたやうにも感じた。仕方がないから後は云はない事にした。すると先生がいきなり道

の端へ寄つて行つた。さうして綺麗に刈り込んだ生垣の下で、裾をまくつて小便をした。私は先生が用を足す間ほんやり其處に立つてゐた。

『やあ失敬』

先生は斯ういつて又歩き出した。私はとうとう先生を遣り込める事を断念した。私達の通る道は段段賑かになつた。今迄ちらほらと見えた廣い畠の斜面や平地が、全く眼に入らないやうに左右の家並が揃つてきた。それでも所所宅地の隅などに、豌豆の蔓を竹にからませたり、金網で雞を圍ひ飼ひにしたりするのが閑靜に眺められた。市中から歸る駄馬が仕切りなく擦れ違つて行つた。こんなものに始終氣を奪られがちな私は、さつき迄胸の中にあつた問題を何處かへ振り落して仕舞つた。先生が突然其處へ後戻りをした時私は實際それを忘れてゐた。

『私は先刻さつきそんなに昂奮したやうに見えたんですか』

『そんなにと云ふ程でもありませんが、少し……』

『いや見えても構はない。實際昂奮するんだから。私は財産の事をいふと屹度昂奮するんです。君には何う見えるか知らないが、私は是で大變執念深い男なんだから。人から受けた屈辱や損害は、十年立つても二十年立つても忘れやしないんだから』

先生の言葉は元よりも猶昂奮してゐた。然し私の驚いたのは、決して其調子ではなかつた。寧ろ先生の言葉が私の耳に訴へる意味そのものであつた。先生の口から斯んな自白を聞くのは、いかな私にも全くの意外に相違なかつた。私は先生の性質の特色として、斯んな執著力を未だ嘗て想像した事さへなかつた。私は先生をもつと弱い人と信じてゐた。さうして其弱くて高い處に、私の懐かしみの根を置いてゐた。一時の氣分で先生にちよつと楯を突いて見ようとした私は、此言葉の前に小さくなつた。先生は斯う云つた。『私は他ひとに欺かれたのです。しかも血のつづいた親戚のものから欺かれたのです。私は

決してそれを忘れないのです。私の父の前には善人であつたらしい彼等は、父の死ぬや否や許しがたい不徳義漢に變つたのです。私は彼等から受けた屈辱と損害を子供の時から今日迄脊負はされてゐる。恐らく死ぬ迄脊負はされ通しでせう。私は死ぬ迄それを忘れる事が出来ないんだから。然し私はまだ復讐をせずにいる。考へると私は個人に對する復讐以上の事を現に遣つてゐるんだ。私は彼等を憎む計りぢやない、彼等が代表してゐる人間といふものを、一般に憎む事を覺えたのだ。私はそれで澤山だと思ふ』

私は慰藉の言葉さへ口へ出せなかつた。

三十一

其日の談話も遂にこれぎりで發展せずになりました。私は寧ろ先生の態度に畏縮して、先へ進む氣が起らなかつたのである。

二人は市の外れから電車に乗つたが、車内では殆ど口を利かなかつた。電車を降りると間もなく別れなければならなかつた。別れる時の先生は又變つてゐた。常よりは晴れやかな調子で、『是から六月迄は一番氣樂な時ですね。ことによると生涯で一番氣樂かも知れない。精出して遊び玉へ』と云つた。私は笑つて帽子を脱つた。其時私は先生の顔を見て、先生は果して心の何處で、一般の人間を憎んでゐるのだらうかと疑つた。その眼、その口、何處にも厭世的の影は射してゐなかつた。

私は思想上の問題に就いて、大いなる利益を先生から受けた事を自白する。然し同じ問題に就いて、利益を受けようとしても、受けられない事が間間あつたと云はなければならぬ。先生の談話は時として不得要領に終つた。其日二人の間に起つた郊外の談話も、此不得要領の一例として私の胸の裏に残つた。

無遠慮な私は、ある時遂にそれを先生の前に打ち明けた。先生は笑つてゐた。私は斯

う云つた。

『頭が鈍くて要領を得ないのは構ひませんが、ちやんと解つてる癖に、はつきり云つて呉れないのは困ります』

『私は何も隠してやしません』

『隠してゐらつしやいます』

『あなたは私の思想とか意見とかいふものと、私の過去とを、ごちやごちやに考へてゐるんぢやありませんか。私は貧弱な思想家ですけども、自分の頭で纏め上げた考へを無暗に人に隠しやしません。隠す必要がないんだから。けれども私の過去を悉くあなたの前に物語らなくてはならないとなると、それは又別問題になります』

『別問題とは思はれません。先生の過去が生み出した思想だから、私は重きを置くのです。二つのものを切り離したら、私には殆ど価値のないものになります。私は魂の吹き

込まれてゐない人形を與へられた丈で、満足は出来ないのです』

先生はあきれたと云つた風に、私の顔を見た。巻煙草を持つてゐた其手が少し顫へた。

『あなたは大膽だ』

『ただ眞面目なんです。眞面目に人生から教訓を受けたいのです』

『私の過去を許してもですか』

許くといふ言葉が、突然恐しい響きを以つて、私の耳を打つた。私は今私の前に坐つてゐるのが、一人の罪人であつて、不斷から尊敬してゐる先生でないやうな氣がした。先生の顔は蒼かつた。

『あなたは本當に眞面目なんですか』と先生が念を押した。『私は過去の因果で、人を疑りつけてゐる。だから實はあなたも疑つてゐる。然し何うもあなた丈は疑りたくない。

あなたは疑るには餘りに單純すぎる様だ。私は死ぬ前にたつた一人で好いから、他を信

用して死にたいと思つてゐる。あなたは其たつた一人になれますか。なつて呉れますか。あなたは腹の底から眞面目ですか』

『もし私の命が眞面目なものなら、私の今いつた事も眞面目です』

私の聲は顫へた。

『よろしい』と先生がいつた。『話しませう。私の過去を残らず、あなたに話して上げませう。其代り……。いやそれは構はない。然し私の過去はあなたに取つて夫程有益でないかも知れませんよ。聞かない方が増しかも知れませんよ。それから、——今は話せないんだから、其積りでゐて下さい。適當の時機が来なくつちや話さないんだから』

私は下宿へ歸つてからも一種の壓迫を感じた。

三十二

私の論文は自分が評價してゐた程に、教授の眼にはよく見えなかつたらしい。それでも私は豫定通り及第した。卒業式の日、私は黴臭くなつた古い冬服を行李の中から出して著た。式場に竝ぶと、何れも是もみな暑さうな顔ばかりであつた。私は風の通らない厚羅紗の下に密封された自分の身體を持て餘した。しばらく立つてゐるうちに手に持つたハンケチがぐしよぐしよになつた。

私は式が済むとすぐ歸つて裸體はだかになつた。下宿の二階の窓をあけて、遠眼鏡とほめがねのやうにぐるぐる巻いた卒業證書の穴から、見える丈けの世の中を見渡した。それから其卒業證書を机の上に放り出した。さうして大の字なりになつて、室へやの眞中に寐そべつた。私は寐ながら自分の過去を顧た。又自分の未來を想像した。すると其間に立つて一區切りを附けてゐる此卒業證書なるものが、意味のあるやうな、又意味のないやうな變な紙に思はれた。

私は其晩先生の家へ御馳走に招かれて行つた。是はもし卒業したら其日の晩餐は餘所で喰はずに、先生の食卓で済ますといふ前からの約束であつた。

食卓は約束通り座敷の縁近くに据ゑられてあつた。模様の織り出された厚い糊の硬い卓布テーブルクロスが美しく且清らかに電燈の光を射返してゐた。先生のうちで飯を食ふと、屹度此西洋料理店に見るやうな白いリンネルの上に、箸や茶椀が置かれた。さうしてそれが必ず洗濯したての眞白なものに限られてゐた。

『カラやカフスと同じ事さ。汚れたのを用ゐる位なら、一層始から色の著いたものを使ふが好い。白ければ純白でなくちや』

斯う云はれて見ると、成程先生は潔癖であつた。書齋なども實に整然と片附いてゐた。無頓著な私には、先生のさういふ特色が折折著しく眼に留まつた。

『先生は癩症ですね』とかつて奥さんに告げた時、奥さんは『でも著物などは、それ程

氣にしないやうですよ』と答へた事があつた。それを傍そばに聞いてゐた先生は、『本當をいふと、私は精神的に癩症なんです。それで始終苦しいんです。考へると實に馬鹿馬鹿しい性分だ』と云つて笑つた。精神的に癩性といふ意味は、俗に神経質といふ意味か、又は倫理的に潔癖だといふ意味か、私には解らなかつた。奥さんにも能く通じないらしかつた。

其晩私は先生と向ひ合はせに、例の白い卓布の前に坐つた。奥さんは二人を左右に置いて、獨り庭の方を正面にして席を占めた。

『御目出たう』と云つて、先生が私のために盃を上げて呉れた。私は此盃に對して夫程嬉しい氣を起さなかつた。無論私自身の心が此言葉に反響するやうに、飛び立つ嬉しさを有つてゐなかつたのが、一つの原因であつた。けれども先生の云ひ方も決して私の嬉しさを唆る浮うき浮うきした調子を帯びてゐなかつた。先生は笑つて杯を上げた。私は其笑のうちそそに、些とも意地の悪いアイロニーを認めなかつた。同時に目出たいといふ眞情も汲み

取る事が出来なかつた。先生の笑は、『世間はこんな場合によく御目出たうと云ひたがるものですね』と私に物語つてゐた。

奥さんは私に『結構ね。嘸御父さんや御母さんは御喜びでせう』と云つて呉れた。私は突然病氣の父の事を考へた。早くあの卒業證書を持つて行つて見せて遣らうと思つた。『先生の卒業證書は何うしました』と私が聞いた。

『何うしたかね、——まだ何處かに仕舞つてあつたかね』と先生が奥さんに聞いた。

『ええ、たしか仕舞つてある筈ですが』

卒業證書の在り處は二人とも能く知らなかつた。

三十三

飯になつた時、奥さんは傍そばに坐つてゐる下女を次へ立たせて、自分で給仕の役をつと

めた。これが表立たない客に對する先生の家の仕來りらしかつた。始めの二回は私も窮屈を感じたが、度數の重なるにつけ、茶椀を奥さんの前へ出すのが、何でもなくなつた。

『御茶？御飯？随分よく食べるのね』

奥さんの方でも思ひ切つて遠慮のない事を云ふことがあつた。然し其日は、時候が時候なので、そんなに調戲からかはれる程食慾が進まなかつた。

『もう御仕舞。あなた近頃大變小食になつたのね』

『小食になつたんぢやありません。暑いで食はれないんです』

奥さんは下女を呼んで食卓を片付けさせた後へ、改めてアイスクリームと水菓子を運ばせた。

『是は宅うちで拵へたのよ』

用のない奥さんには、手製のアイスクリームを客に振舞ふだけの餘裕があると見えた。

私はそれを二杯更へて貰つた。

『君も愈卒業したが、是から何をする氣ですか』と先生が聞いた。先生は半分縁側の方へ席をずらして、敷居際で脊中を障子にもた靠せてゐた。

私にはただ卒業したといふ自覺がある丈で、是から何をしようといふ目的あてもなかつた。返事にためらつてゐる私を見た時、奥さんは『教師?』と聞いた。それにも答へずになると、今度は、『ぢや御役人?』と又聞かれた。私も先生も笑ひ出した。

『本當いふと、まだ何をする考へもないんです。實は職業といふものに就いて、全く考へた事がない位なんですから。だいち何れが善いか、何れが悪いか、自分が遣つて見た上でないと解らないんだから、選擇に困る譯だと思ひます』

『それも左右さきね。けれどもあなたは必竟財産があるからそんな香氣のんきな事を云つてゐられるのよ。是が困る人で御覽なさい。中中あなたの様に落附いぢや居られないから』

私の友達には卒業しない前から、中學教師の口を探してゐる人があつた。私は腹の中
で奥さんのいふ事實を認めた。然し斯う云つた。

『少し先生にかぶれたんでせう』

『碌なかぶれ方をして下さらないのね』

先生は苦笑した。

『かぶれても構はないから、其代り此間云つた通り、御父さんの生きてるうちに、相當の財産を分けて貰つて御置きなさい。それでないと決して油斷はならない』

私は先生と一所に、郊外の植木屋の廣い庭の奥で話した、あの躑躅の咲いてゐる五月の初めを思ひ出した。あの時歸り途に、先生が昂奮した語氣で、私に物語つた強い言葉を再び耳の底で繰返した。それは強いばかりでなく、寧ろ凄い言葉であつた。けれども事實を知らない私には同時に徹底しない言葉でもあつた。

『奥さん、御宅の財産は餘ッ程あるんですか』

『何だつてそんな事を御聞きになるの』

『先生に聞いても教へて下さらないから』

奥さんは笑ひながら先生の顔を見た。

『教へて上げる程ないからでせう』

『でも何の位あつたら先生のやうにしてゐられるか、宅へ歸つて一つ父に談判する時の参考にしますから聞かして下さい』

先生は庭の方を向いて、澄まして煙草を吹かしてゐた。相手は自然奥さんでなければならなかつた。

『何の位つて程ありやしませんわ。まあ斯うして何うか斯うか暮して行かれる丈よ、あなた。——そりや何うでも宜いとして、あなたは是から何か爲さらくつちや本當に可

けませんよ。先生のやうにごろごろ計りしてゐちや……』

『ごろごろ計りしてゐやしないさ』

先生はちよつと顔丈向け直して、奥さんの言葉を否定した。

三十四

私は其夜十時過ぎに先生の家を辭した。二三日うちに歸國する筈になつてゐたので、座を立つ前に私は一寸暇乞の言葉を述べた。

『又當分御目にかかれませんか』

『九月には出て入らつしやるんでせうね』

私はもう卒業したのだから、必ず九月に出て來る必要もなかつた。然し暑い盛りの八月を東京迄來て送らうとも考へてゐなかつた。私には位置を求めるための貴重な時間と

いふものがなかつた。

『まあ九月頃になるでせう』

『ぢや随分御機嫌よう。私達も此夏はことによると何處かへ行くかも知れないのよ。随分暑さうだから。行つたら又繪葉書でも送つて上げませう』

『何ちらの見當です。若し入らつしやるとすれば』

先生は此問答をにやにや笑つて聞いてゐた。

『何まだ行くとも行かないとも極めてるやしないんです』

席を立たうとした時に、先生は急に私をつらまへて、『時に御父さんの病氣は何うなんです』と聞いた。私は父の健康に就いて殆ど知る所がなかつた。何とも云つて來ない以上、悪くはないのだらう位に考へてゐた。

『そんなに容易く考へられる病氣ぢやありませんよ。尿毒症が出ると、もう駄目なんだ

から』

尿毒症といふ言葉も意味も私には解らなかつた。此前の冬休みに國で醫者と會見した時に、私はそんな術語を丸で聞かなかつた。

『本當に大事にして御上げなさいよ』と奥さんもいつた。『毒が腦へ廻るやうになると、もう夫つきりよ、あなた。笑ひ事ぢやないわ』

無經驗な私は氣味を悪がりながらも、にやにやしてゐた。

『何うせ助からない病氣ださうですから、いくら心配したつて仕方がありません』

『さう思ひ切りよく考へれば、夫迄ですけれども』

奥さんは昔同じ病氣で死んだといふ自分の御母さんの事でも憶ひ出したのか、沈んだ調子で斯ういつたなり下を向いた。私も父の運命が本當に氣の毒になつた。

すると先生が突然奥さんの方を向いた。

「静、御前はおれより先へ死ぬだらうかね」

「何故」

「何故でもない、ただ聞いて見るのさ。それとも己おれの方が御前より前に片附くかな。大抵世間ぢや旦那が先で、細君が後へ残るのが當り前のやうになつてるね」

「さう極つた譯でもないわ。けれども男の方は何うしても、年が上でせう」

「だから先へ死ぬといふ理窟なのかね。すると己も御前より先にあの世へ行かなくつちやならない事になるね」

「あなたは特別よ」

「さうかね」

「だつて丈夫なんですもの。殆ど煩わづらつた例たあしがないぢやありませんか。そりや何うしたつて私の方が先だわ」

「先かな」

「え、屹度先よ」

先生は私の顔を見た。私は笑つた。

「然しもおれの方が先へ行くとするね。さうしたら御前何うする」
「何うするつて……」

奥さんは其處で口籠つた。先生の死に對する想像的な悲哀が、ちよつと奥さんの胸を襲つたらしかつた。けれども再び顔をあげた時は、もう氣分を更へてゐた。

「何うするつて、仕方がないわ、ねえあなた。老少不定つていふ位だから」
奥さんはことさらに私の方を見て笑談らしく斯う云つた。

私は立て掛けた腰を又卸して、話の區切りの附く迄二人の相手になつてゐた。『君は何う思ひます』と先生が聞いた。

先生が先へ死ぬか、奥さんが早く亡くなるか、固より私に判断のつくべき問題ではなかつた。私はただ笑つてゐた。

『壽命は分りませんね、私にも。是ばかりは本當に壽命ですからね。生れた時にちやんと極つた年數をもらつて來るんだから仕方がないわ。先生の御父さんや御母さんなんか、殆ど同じよ、あなた、亡くなつたのが』

『亡くなられた日がですか』

『まさか日迄同じぢやないけれども。でもまあ同じよ。だつて續いて亡くなつちまつたんですもの』

此智識は私にとつて新らしいものであつた。私は不思議に思つた。

『何うしてさう一度に死なれたんですか』

奥さんは私の間に答へようとした。先生はそれを遮つた。

『そんな話は御止しよ。つまらないから』

先生は手に持つた團扇をわざとばたばた云はせた。さうして又奥さんを顧た。

『靜、おれが死んだら此家を御前にやらう』

奥さんは笑ひ出した。

『序に地面も下さいよ』

『地面は他のものだから仕方がない。其代りおれの持つてるものは皆御前に遣るよ』

『何うも有難う。けれども横文字の本なんか貰つても仕様がないわね』

『古本屋に賣るさ』

『賣ればいくらになつて』

先生はいくらとも云はなかつた。けれども先生の話は、容易に自分の死といふ遠い問題を離れなかつた。さうして其の死は必ず奥さんの前に起るものと假定されてゐた。奥さんも最初のうちは、わざとたわいのない受け答へをしてゐるらしく見えた。それが何時の間にか、感傷的な女の心を重苦しくした。

『おれが死んだら、おれが死んだらつて、まあ何遍仰しやるの。後生だからもう好い加減にして、おれが死んだら止して頂戴。縁喜でもない。あなたが死んだら、何でもあなたの思ひ通りにして上げるから、それで好いぢやありませんか』

先生は庭の方を向いて笑つた。然しそれぎり奥さんの厭がる事は云はなくなつた。私もあまり長くなるので、すぐ席を立つた。先生と奥さんは玄關迄送つて出た。

『御病人を御大事に』と奥さんがいつた。

『また九月に』と先生がいつた。

私は挨拶をして格子の外へ足を踏み出した。玄關と門の間にあるこんもりした木犀の一株が、私の行手を塞ぐやうに夜陰のうちに枝を張つてゐた。私は二三歩動き出しながら、黒ずんだ葉に被はれてゐる其梢を見て、來るべき秋の花と香を想ひ浮べた。私は先生の宅うちと此木犀とを、以前から心のうちで、離す事の出来ないもののやうに、一所に記憶してゐた。私が偶然其樹の前に立つて、再びこの宅うちの玄關を跨ぐべき次の秋に思ひを馳せた時、今迄格子の間から射してゐた玄關の電燈がふつと消えた。先生夫婦はそれぎり奥へ這入つたらしかつた。私は一人暗い表へ出た。

私はすぐ下宿へは戻らなかつた。國へ歸る前に調へる買物もあつたし、御馳走を詰めた胃袋にくつろぎを與へる必要もあつたので、ただ賑かな町の方へ歩いて行つた。町はまだ宵の口であつた。用事もなささうな男女がぞろぞろ動く中に、私は今日私と一所に卒業したなにがしに會つた。彼は私を無理やりにある酒場へ連れ込んだ。私は其處で麥

酒の泡のやうな彼の氣焔を聞かされた。私の下宿に歸つたのは十二時過であつた。

三十六

私は其翌日も暑さを冒して、頼まれものを買ひ集めて歩いた。手紙で注文を受けた時は何でもないうやうに考へてゐたのが、いざとなると大變億劫おくじやくに感ぜられた。私は電車の中で汗を拭きながら、他の時間と手數に氣の毒といふ觀念を丸で有つてゐない田舎者を憎らしく思つた。

私は此一夏を無爲に過す氣はなかつた。國へ歸つてからの日程といふやうなものを豫め作つて置いたので、それを履行するに必要な書物を手に入れなければならなかつた。私は半日を丸善の二階で潰す覺悟でゐた。私は自分に關係の深い部門の書籍棚の前に立つて、隅から隅迄一冊づつ點檢して行つた。

買物のうちで一番私を困らせたのは女の半襟であつた。小僧にいふと、いくらでも出しては呉れるが、諸何れを選んでいいのか、買ふ段になつては、只迷ふ丈であつた。其上價が極めて不定であつた。安からうと思つて聞くと非常に高かつたり、高からうと考へて、聞かずにゐると、却つて大變安かつたりした。或はいくら比べて見ても、何處から價格の差違が出るのか見當の附かないものもあつた。私は全く弱らせられた。さうして心のうちで、何故先生の奥さんを煩はさなかつたかを悔いた。

私は靴を買つた。無論和製の下等な品に過ぎなかつたが、それでも金具やなどがぴかぴかしてゐるので、田舎ものを威嚇おどろかすには十分であつた。此靴を買ふといふ事は、私の母の注文であつた。卒業したら新らしい靴を買つて、その中に一切の土産物を入れて歸るやうにと、わざわざ手紙の中に書いてあつた。私は文句を讀んだ時に笑ひ出した。私には母の料簡が解らないといふよりも、其言葉が一種の滑稽として訴へたのである。

私は暇乞をする時先生夫婦に述べた通り、それから三日目の汽車で東京を立つて國へ歸つた。此冬以來父の病氣に就いて先生から色色の注意を受けた私は、一番心配しなければならぬ地位にありながら、何ういふものか、それが大して苦にならなかつた。私は寧ろ父が居なくなつたあとの母を想像して氣の毒に思つた。其の位だから私は心の何處かで、父は既に亡くなるべきものと覺悟してゐたに違ひなかつた。九州にゐる兄へ遣つた手紙のなかにも、私は父の到底故のやうな健康體になる見込のない事を述べた。一度などは職務の都合もあらうが、出来るなら繰合せて此夏位一度顔丈でも見に歸つたら何うだと迄書いた。其上年寄が二人ぎりて田舎にゐるのは定めて心細いだらう、我我も子として遺憾の至りであるといふやうな感傷的な文句さへ使つた。私は實際心に浮ぶ儘を書いた。けれども書いたあとの氣分は書いた時とは違つてゐた。

私はさうした矛盾を汽車の中で考へた。考へてゐるうちに自分が自分に氣の變りやす

い輕薄もののやうに思はれて來た。私は不愉快になつた。私は又先生夫婦の事を想ひ浮べた。ことに二三日前晩食に呼ばれた時の會話を憶ひ出した。

『何つちが先へ死ぬだらう』

私は其晩先生と奥さんの間に起つた疑問をひとり口の内で繰返して見た。さうして此疑問には誰も自信をもつて答へる事が出来ないのだと思つた。然し何方が先へ死ぬと判然分つてゐたならば、先生は何うするだらう。奥さんは何うするだらう。先生も奥さんも、今のやうな態度であるより外に仕方がないだらうと思つた。(死に近づきつつある父を國元に控へながら、此私が何うする事も出来ないやうに)。私は人間を果敢ないものに觀じた。人間の何うする事も出来ない持つて生れた輕薄を、果敢ないものに觀じた。

中 兩親と私

一

宅へ歸つて案外に思つたのは、父の元氣が此前見た時と大して變つてゐない事であつた。

『ああ歸つたかい。さうか、それでも卒業が出来てまあ結構だつた。一寸御待ち、今顔を洗つて来るから』

父は庭へ出て何か爲てゐた所であつた。古い麥藁帽の後へ、日除ひよけのために括り附けた薄汚いハンケチをひらひらさせながら、井戸のある裏手の方へ廻つて行つた。

學校を卒業するのを普通の人間として當然のやうに考へてゐた私は、それを豫期以上

に喜んで呉れる父の前に恐縮した。

『卒業が出来てまあ結構だ』

父は此言葉を何遍も繰返した。私は心のうちで此父の喜びと、卒業式のあつた晩先生の家いへの食卓で『御目出たう』と云はれた時の先生の顔附きとを比較した。私には口で祝つてくれながら、腹の底でけなししてゐる先生の方が、それ程にもないものを珍らしさうに嬉しがる父よりも、却つて高尚に見えた。私は仕舞に父の無知から出る田舎臭い所に不快を感じ出した。

『大學位卒業したつて、それ程結構でもありません。卒業するものは毎年何百人だつてあります』

私は遂に斯んな口の利きやうをした。すると父が變な顔をした。

『何も卒業したから結構とばかり云ふんぢやない。そりや卒業は結構に違ひないが、お

れの云ふのはもう少し意味があるんだ。それが御前に解つてゐて呉れさへすれば、……』
私は父から其後を聞かうとした。父は話したくなささうであつたが、とうとう斯う云つた。

『つまり、おれが結構といふ事になるのさ。おれは御前の知つてゐる通りの病氣だらう。去年の冬御前に會つた時、ことによるともう三月か四月位なものだらうと思つてゐたのさ。それが何ういふ仕合せか、今日迄斯うしてゐる。起居たよりに不自由なく斯うしてゐる。そこへ御前が卒業して呉れた。だから嬉しいのさ。折角丹精した息子が、自分の居なくなつた後で卒業してくれるよりも、丈夫なうちに學校を出てくれる方が親の身になれば嬉しいだらうぢやないか。大きな考へを有つてゐる御前から見たら、高が大學を卒業した位で、結構だ結構だと云はれるのは餘り面白くもないだらう。然しおれの方から見て御覽、立場が少し違つてゐるよ。つまり卒業は御前に取つてより、此おれに取つて結構

なんだ。解つたかい』

私は一言もなかつた。詫る以上に恐縮して俯向いてゐた。父は平氣なうちに自分の死を覺悟してゐたものと見える。しかも私の卒業する前に死ぬだらうと思ひ定めてゐたと見える。其卒業が父の心に何の位響くかも考へずにあるた私は全く愚おろかものであつた。私は鞆の中から卒業證書を取り出して、それを大事さうに父と母に見せた。證書は何かに壓し潰されて、元の形を失つてゐた。父はそれを鄭寧のに伸した。

『こんなものは卷いたなりに手に持つて來るものだ』

『中に心しんでも入れると好かつたのに』と母も傍かたはらから注意した。

父はしばらくそれを眺めた後、起つて床の間の所へ行つて、誰の目にもすぐ這入るやうな正面へ證書を置いた。何時もの私ならず何とかいふ筈であつたが、其時の私は丸で平生と違つてゐた。父や母に對して少しも逆らう氣が起らなかつた。私はだまつて父

の爲すが儘に任せて置いた。一旦癖のついた鳥の子紙の證書は、中中父の自由にならなかつた。適當な位置に置かれるや否や、すぐ己に自然の勢ひを得て倒れようとした。

二

私は母を蔭へ呼んで父の病狀を尋ねた。

『御父さんはあんなに元氣さうに庭へ出たり何かしてゐるが、あれで可いんですか』

『もう何ともないやうだよ。大方好く御なりなんだらう』

母は案外平氣であつた。都會から懸け隔つた森や田の中に住んでゐる女の常として、母は斯ういふ事に掛けては丸で無知識であつた。それにしても此前父が卒倒した時には、あれ程驚いて、あんなに心配したものを、と私は心のうちで異いな感じを抱いた。

『でも醫者はあの時到底六とづかしいつて宣告したぢやありませんか』

「だから人間の身體からだほど不思議なものはないと思ふんだよ。あれ程御醫者が手重く云つたものが、今迄しやんしやんしてゐるんだからね。御母さんも始めのうちには心配して、成るべく動かさないやうにと思つてたんだがね。それ、あの氣性きせうだらう。養生はしなざるけれども、強情でねえ。自分が好いと思ひ込んだら、中中私のいふ事なんか、聞きさうにもなさらないんだからね」

私は此前歸つた時、無理に床を上げさして、髭を剃つた父の様子と態度とを思ひ出した。「もう大丈夫、御母さんがあんまり仰山過ぎるから不可いけないんだ」といつた其時の言葉を考へて見ると、満更母まんせぼばかり責める氣にもなれなかつた。「然し傍そばでも少しは注意しなくつちや」と云はうとした私はとうとう遠慮して何も口へ出さなかつた。ただ父の病の性質に就いて、私の知る限りを教へるやうに話して聞かせた。然し其大部分は先生と先生の奥さんから得た材料に過ぎなかつた。母は別に感動した様子も見せなかつた。

「へえ、矢つ張り同じ病氣おんなでね。御氣の毒だね。いくつで御亡くなりかえ、其方は」などと聞いた。

私は仕方がないから、母を其儘にして置いて直接父に向つた。父は私の注意を母よりは眞面目に聞いてくれた。「尤もだ。御前のいふ通りだ。けれども、己の身體は畢竟己の身體で、其己の身體に就いての養生法は、多年の經驗上、己が一番能く心得てゐる筈だからね」と云つた。それを聞いた母は苦笑した。

「それ御覽な」と云つた。

「でも、あれで御父さんは自分でちやんと覺悟丈はしてゐるんですよ。今度私が卒業して歸つたのを大變喜んでゐるのも、全く其爲なんです。生きてゐるうちに卒業は出来まいと思つたのが、達者なうちに免狀を持つて來たから、それで嬉しいんだつて、御父さんは自分でさう云つてゐましたぜ」

『そりや、御前、口でこそさう御云ひだけれどもね。御腹おなかのなかではまだ大丈夫だと思つて御出でのだよ』

『左右さうでせうか』

『まだまだ十年も二十年も生きる氣で御出でなのだよ。尤も時時はわたしにも心細いやうな事を御云ひだがね。おれも此分ぢやもう長い事もあるまいよ、おれが死んだら、御前はどうする、一人で此家うちにゐる氣かなんて』

私は急に父が居なくなつて母一人が取り残された時の、古い廣い田舎家ひなやかやを想像して見た。此家から父一人を引き去つた後は、其儘で立ち行くだらうか。兄は何うするだらうか。母は何といふだらうか。さう考へる私は又此處の土を離れて、東京で氣樂に暮らしに行けるだらうか。私は母を眼の前に置いて、先生の注意——父の丈夫でゐるうちに、分けて貰ふものは、分けて貰つて置けといふ注意を、偶然思ひ出した。

『なにね、自分で死ぬ死ぬつて云ふ人に死んだ試しはないんだから安心だよ。御父さんなんども、死ぬ死ぬつて云ひながら、是から先まだ何年生きなさるか分るまいよ。夫よるか黙つてる丈夫の人の方が劍呑けんのみんさ』

私は理窟から出たとも統計から來たとも知れない、此陳腐なやうな母の言葉を、黙然と聞いてゐた。

三

私の爲に赤い飯を炊いて客をするといふ相談が、父と母の間に起つた。私は歸つた當日から、或は斯んな事になるだらうと思つて、心のうちで暗にそれを恐れてゐた。私はすぐ斷つた。

『あんまり仰山な事は止よして下さい』

私は田舎の客が嫌ひだつた。飲んだり食つたりするのを、最後の目的として遣つて來る彼等は、何か事があれば好いといつた風の人ばかり揃つてゐた。私は子供の時から彼等の席に待するのを心苦しく感じてゐた。まして自分のために彼等が來るとなると、私の苦痛は一層甚しいやうに想像された。然し私は父や母の手前、あんな野鄙な人を集めて騒ぐのは止せとも云ひかねた。それで私はただあまり仰山だからとばかり主張した。

『仰山仰山と御云ひだが、些とも仰山ぢやないよ。生涯に二度とある事ぢやないんだからね。御客位するのは當り前だよ。さう遠慮を御爲でない』

母は私が大學を卒業したのを、嫁でも貰つたと同じ程度に、重く見てゐるらしかつた。『呼ばなくつても好いが、呼ばないと又何とか云ふから』

是は父の言葉であつた。父は彼等の陰口かげぐちを氣にしてゐた。實際彼等はこんな場合に、自分達の豫期通りにならないと、すぐ何とか云ひたがる人人であつた。

『東京と違つて田舎は蒼蠅うらまいからね』

父は斯うも云つた。

『御父さんの顔もあるんだから』と母が又附け加へた。

私は我を張る譯にも行かなかつた。何うでも二人の都合の好いやうにしたらと思ひ出した。

『つまり私のためなら、止して下さいと云ふ丈なんです。蔭で何か言はれるのが厭だからといふ御主意なら、そりや又別です。あなたがたに不利益な事を私が強ひて主張したつて仕方がありません』

『さう理窟を云はれると困る』

父は苦い顔をした。

『何も御前の爲にするんぢやないと御父さんが仰しやるんぢやないけれども、御前だつ

て世間への義理位は知つてゐるだらう』

母は斯うなると女だけにしどろもどろな事を云つた。其代り口數からいふと、父と私を二人寄せても中中敵ふどころではなかつた。

『學問をさせると人間が兎角理窟つほくなつて不可い』

父はただ是丈しか云はなかつた。然し私は此簡單な一句のうちに父が平生から私に對して有つてゐる不平の全體を見た。私は其時自分の言葉使ひの角張つた所に氣が附かずに、父の不平の方ばかりを無理の様に思つた。

父は其夜また氣を更へて、客を呼ぶなら何日にするかと私の都合を聞いた。都合の好いも悪いもなしに唯ぶらぶら古い家の中に寐起してゐる私に、斯んな問を掛けるのは、父の方が折れて出たのと同じ事であつた。私は此穩かな父の前に拘泥こたはらない頭を下けた。私は父と相談の上招待の日取を極めた。

其日取のまだ來ないうちに、ある大きな事が起つた。それは明治天皇の御病氣の報知であつた。新聞紙ですぐ日本中へ知れ渡つた此事件は、一軒の田舎家のうちに多少の曲折を経て漸く纏まらうとした私の卒業祝ひを、塵の如くに吹き拂つた。

『まあ遠慮申した方が可からう』

眼鏡を掛けて新聞を見てゐた父は斯う云つた。父は黙つて自分の病氣の事も考へてゐるらしかつた。私はつい此間の卒業式に例年の通り大學へ行幸になつた陛下を憶ひ出したりした。

四

小勢こぜいな人數には廣過ぎる古い家がひつそりしてゐる中に、私は行李を解いて書物を繕つくろき始めた。何故か私は氣が落ち附かなかつた。あの目眩めくらしい東京の下宿の二階で、遠く

走る電車の音を耳にしながら、頁を一枚一枚にまくつて行く方が、氣に張りがあつて心持よく勉強が出来た。

私は稍ともすると机にもたれて假寐をした。時にはわざわざ枕さへ出して本式に晝寐を貪る事もあつた。眼が覺めると、蟬の聲を聞いた。うつつから續いてゐるやうな其聲は、急に八釜しく耳の底を搔き亂した。私は凝とそれを聞きながら、時に悲しい思ひを胸に抱いた。

私は筆を執つて友達のだれかれに短い端書又は長い手紙を書いた。其友達のあるものは東京に残つてゐた。あるものは遠い故郷に歸つてゐた。返事の來るのも、音信の届かないのもあつた。私は固より先生を忘れなかつた。原稿紙へ細字で三枚ばかり國へ歸つてから以後の自分といふやうなものを題目にして書き綴つたのを送る事にした。私はそれを封じる時、先生は果してまだ東京にゐるだらうかと疑つた。先生が奥さんと一所に

宅を空ける場合には、五十恰好の切下けの女の人が何處からか來て、留守番をするのが例になつてゐた。私がかつて先生にあの人は何ですかと尋ねたら、先生は何と見えますかと聞き返した。私は其人を先生の親類と思ひ違へてゐた。先生は『私には親類はありませんよ』と答へた。先生の郷里にゐる續きあひの人人と、先生は一向音信の取り遣りをしてゐなかつた。私の疑問にした其留守番の女の人は、先生とは縁のない奥さんの方の親戚であつた。私は先生に郵便を出す時、不圖幅の細い帶を樂に後で結んでゐる其人の姿を思ひ出した。もし先生夫婦が何處かへ避暑にでも行つたあとへ此郵便が届いたら、あの切下けの御婆さんは、それをすぐ轉地先へ送つて呉れる丈の氣轉と親切があるだらうかなどと考へた。其辭その手紙のうちには是といふ程の必要の事も書いてないのを、私は能く承知してゐた。ただ私は淋しかつた。さうして先生から返事の來るのを豫期してかかつた。然し其返事は遂に來なかつた。

父は此前の冬に歸つて來た時程將棋を差したがらなくなつた。將棋盤はほこりの溜つた儘、床の間の隅に片寄せられてあつた。ことに陛下の御病氣以後父は凝と考へ込んでゐるやうに見えた。毎日新聞の來るのを待ち受けて、自分が一番先へ讀んだ。それから其讀みながらをわざわざ私の居る所へ持つて來て呉れた。

『おい御覽、今日も天子様の事が詳しく出てゐる』

父は陛下のことを、つねに天子さまと云つてゐた。

『勿體ない話だが、天子さまの御病氣も、御父さんのとまあ似たものだらうな』

斯ういふ父の顔には深い掛念の曇りがかかつてゐた。斯う云はれる私の胸には又父が何時斃れるか分らないといふ心配がひらめいた。

『然し大丈夫だらう。おれの様な下らないものでも、まだ斯うしてゐられる位だから』
父は自分の達者な保障を自分で與へながら、今にも己に落かかつて來さうな危険を豫

感してゐるらしかつた。

『御父さんは本當に病氣を怖こはがつてるんですよ。御母さんの仰しやるやうに、十年も二十年も生きる氣ぢやなささうですぜ』

母は私の言葉を聞いて當惑さうな顔をした。

『ちつと又將棋でも差すやうに勧めて御覽な』

私は床の間から將棋盤を取り卸して、ほこりを拭いた。

五

父の元氣は次第に衰へて行つた。私を驚かせたハンケチ附の古い麥藁帽子が自然と閑却されるやうになつた。私は黒い煤けた棚の上に載つてゐる其帽子を眺めるたびに、父に對して氣の毒な思ひをした。父が以前のやうに、輕輕かるがると動く間は、もう少し慎んで呉

れたらと心配した。父が凝と坐り込むやうになると矢張り元の方が達者だつたのだといふ氣が起つた。私は父の健康に就いてよく母と話し合つた。

『全く氣の所爲だよ』と母が云つた。母の頭は陛下の病と父の病とを結び附けて考へてゐた。私にはさう計りとも思へなかつた。

『氣ぢやない、本當に身體が悪くないんでせうか。何うも氣分より健康の方が悪くなつて行くらしい』

私は斯う云つて、心のうちで又遠くから相當の醫者でも呼んで、一つ見せようかしらと思案した。

『今年の夏は御前も詰らなからう。折角卒業したのに、御祝もして上げる事が出來ず、御父さんの身體もあの通りだし。それに天子様の御病氣で。——いつその事、歸るすぐに御客でも呼ぶ方が好かつたんだよ』

私が歸つたのは七月の十五六日で、父や母が私の卒業を祝ふために客を呼ばうと云ひだしたのは、それから一週間後であつた。さうして愈と極めた日はそれから又一週間の餘も先になつてゐた。時間に束縛を許さない悠長な田舎に歸つた私は、御蔭で好もしくない社交上の苦痛から救はれたも同じ事であつたが、私を理解しない母は少しも其處に氣が附いてゐないらしかつた。

崩御の報知が傳へられた時、父は其新聞を手にして、『ああ、ああ』と云つた。

『ああ、ああ、天子様もとうとう御かくれになる。己も……………』
父は其後を云はなかつた。

私は黒いすものを買ふために町へ出た。それで旗竿の球を包んで、それで旗竿の先へ三寸幅のひらひらを附けて、門の扉の横から斜に往來へさし出した。旗も黒いひらひらも、風のない空氣のなかにだらりと下つた。私の宅の古い門の屋根は藁で葺いてあつ

た。雨や風に打たれたり又吹かれたりした其藁の色はとくに變色して、薄く灰色を帯びた上に、所所の凸凹^{でこぼこ}さへ眼に著いた。私はひとり門の外へ出て、黒いひらひらと、白いめりんすの地と、地のなかに染め出した赤い日の丸の色とを眺めた。それが薄汚い屋根の藁に映るのも眺めた。私はかつて先生から『あなたの宅の構へは何んな體裁ですか。私の郷里の方とは大分趣が違つてゐますかね』と聞かれた事を思ひ出した。私は自分の生れた此古い家を、先生に見せたくもあつた。又先生に見せるのが恥づかしくもあつた。

私は又一人家のなかへ這入つた。自分の机の置いてある所へ來て、新聞を讀みながら、遠い東京の有様を想像した。私の想像は日本一の大きな都が、何んなに暗いなかで何んなに動いてゐるだらうかの畫面に集められた。私はその黒いなりに動かなければ仕末のつかなくなつた都會の、不安でざわざわしてゐるなかに、一點の燈火の如くに先生の家を見た。私はその時此燈火が音のしない渦の中に自然と捲き込まれてゐる事に氣が附か

なかつた。しばらくすれば、其灯も亦ふつと消えてしまふべき運命を、眼の前に控へてゐるのだとは固より氣が附かなかつた。

私は今度の事件に就いて先生に手紙を書かうかと思つて、筆を執りかけた。私はそれを十行ばかり書いて已めた。書いた所は寸寸に引き裂いて屑籠へ投げ込んだ。(先生に宛ててさう云ふ事を書いて仕方がないとも思つたし、前例に徴して見ると、とても返事を呉れさうになかつたから)。私は淋しかつた。それで手紙を書くのであつた。さうして返事が來れば好いと思ふのであつた。

六

167

八月の半^{なかば}ごろになつて、私はある朋友から手紙を受け取つた。その中に地方の中學教員の口があるが行かないかと書てあつた。此朋友は經濟の必要上自分でそんな地位を探

し廻る男であつた。此口も始めは自分の所へかかつて来たのだが、もつと好い地方へ相談が出来たので、餘つた方を私に譲る氣で、わざわざ知らせて来て呉れたのであつた。私はすぐ返事を出して斷つた。知り合ひの中には、隨分骨を折つて教師の職にありつきたがつてゐるものがあるから、其方へ廻して遣つたら好からうと書いた。

私は返事を出した後で、父と母に其話をした。二人とも私の斷つた事に異存はないやうであつた。

『そんな所へ行かないでも、まだ好い口があるだらう』

斯ういつて呉れる裏に、私は二人が私に對して有つて居る過分な希望を讀んだ。迂闊な父や母は、不相當な地位と収入とを卒業したての私から期待して居るらしかつたのである。

『相當の口つて、近頃ぢやそんな旨い口は中中あるものぢやありません。ことに兄さん

と私とは専門も違ふし、時代も違ふんだから、二人を同じやうに考へられちや少し困ります』

『然し卒業した以上は、少くとも獨立して遣つて行つて呉れなくちや此方も困る。人からあなたの所の御次男は、大學を卒業なすつて何をして御出ですかと聞かれた時に返事が出来ない様ぢやおれも肩身が狭いから』

父は澁面をつくつた。父の考へは古く住み慣れた郷里から外へ出る事を知らなかつた。其郷里の誰彼から、大學を卒業すればいくら位月給が取れるものだらうと聞かれたり、まあ百圓位なものだらうかと云はれたりした父は斯ういふ人人に對して、外聞の悪くないやうに、卒業したての私を片附けたかつたのである。廣い都を根據地として考へてゐる私は、父や母から見ると、丸で足を空に向けて歩く奇體な人間に異らなかつた。私の方でも、實際さういふ人間のやうな氣持を折折起した。私はあからさまに自分の考へを

打ち明けるには、あまりに距離の懸隔の甚しい父と母の前に黙然としてゐた。

『御前のよく先生先生といふ方にでも御願したら好いぢやないか。斯んな時こそ』

母は斯うより外に先生を解釋する事が出来なかつた。其先生は私に國へ歸つたら父の生きてゐるうちに早く財産を分けて貰へと勧める人であつた。卒業したから、地位の周旋をして遣らうといふ人ではなかつた。

『其先生は何をしてゐるのかい』と父が聞いた。

『何もして居ないんです』と私が答へた。

私はとくの昔から先生の何もしてゐないといふ事を父にも母にも告げた積であつた。さうして父はたしかに夫を記憶してゐる筈であつた。

『何もしてゐないと云ふのは、また何ういふ譯かね。御前がそれ程尊敬する位な人なら何か遣つてゐるさうなものだがね』

父は斯ういつて、私を諷した。父の考へでは、役に立つものは世の中へ出てみんな相當の地位を得て働いてゐる。畢竟やくざだから遊んで居るのだと結論してゐるらしかつた。

『おれのような人間だつて、月給こそ貰つちやるないが、是でも遊んでばかりゐるんぢやない』

父はかうも云つた。私は夫でもまだ黙つてゐた。

『御前のいふ様な偉い方なら、屹度何か口を探して下さるよ。頼んで御覽なのかい』と母が聞いた。

『いいえ』と私は答へた。

『ぢや仕方がないぢやないか。何故頼まないんだい。手紙でも好いから御出しな』
『ええ』

私は生返事をして席を立つた。

七

父は明らかに自分の病氣を恐れてゐた。然し醫者の來るたびに蒼蠅い質問を掛けて相手を困らす質までもなかつた。醫者の方でも亦遠慮して何とも云はなかつた。

父は死後の事を考へてゐるらしかつた。少くとも自分が居なくなつた後のわが家を想像して見るらしかつた。

『子供に學問をさせるのも、好し悪ししだね。折角修業をさせると、其子供は決して宅へ歸つて來ない。是ぢや手もなく親子を隔離するために學問させるやうなものだ』

學問をした結果兄は今遠國にゐた。教育を受けた因果で、私は又東京に住む覺悟を固くした。斯ういふ子を育てた父の愚痴はもとより不合理ではなかつた。永年ながねん住み古した

田舎家の中に、たつた一人取り残されさうな母を描き出す父の想像はもとより淋しいに違ひなかつた。

わが家は動かす事の出來ないものと父は信じ切つてゐた。其中に住む母も亦命のある間は、動かす事の出來ないものと信じてゐた。自分が死んだ後、この孤獨な母を、たつた一人伽藍堂のわが家に取り残すのも亦甚しい不安であつた。それなのに、東京で好い地位を求めると云つて、私を強ひたがる父の頭には矛盾があつた。私は其矛盾を可笑しく思つたと同時に、其御蔭で又東京へ出られるのを喜んだ。

私は父や母の手前、此地位を出來る丈の努力で求めつつある如くに装はなくてはならなかつた。私は先生に手紙を書いて、家の事情を精しく述べた。もし自分の力で出來る事があつたら何でもするから周旋して呉れと頼んだ。私は先生が私の依頼に取り合ふまゝと思ひながら此手紙を書いた。又取り合ふ積でも、世間の狭い先生としては何うする

事も出来まいと思ひながら此手紙を書いた。然し私は先生から此手紙に對する返事が吃度來るだらうと思つて書いた。

私はそれを封じて出す前に母に向つて云つた。

『先生に手紙を書きましたよ。あなたの仰しやつた通り。一寸讀んで御覽なさい』

母は私の想像したごとくそれを讀まなかつた。

『さうかい、夫ぢや早く御出し。そんな事は他ひとが氣を附けないでも、自分で早く遣るものだよ』

母は私をまだ子供のやうに思つてゐた。私も實際子供のやうな感じがした。

『然し手紙ぢや用は足りませんよ。何うせ、九月にでもなつて、私が東京へ出てからでなくつちや』

『そりや左右きょうかも知れないけれども、又ひよつとして、何んな好い口がないとも限らな

いんだから、早く頼んで置くに越した事はないよ』

『ええ。兎に角返事は來るに極つてますから、さうしたら又御話しませう』

私は斯んな事に掛けて几帳面な先生を信じてゐた。私は先生の返事の來るのを心待ちに待つた。けれども私の豫期はつひに外れた。先生からは一週間経つても何の音信たまひもなかつた。

『大方どこかへ避暑にでも行つてゐるんでせう』

私は母に向つて言譯らしい言葉を使はなければならなかつた。さうして其言葉は母に對する言譯計りでなく、自分の心に對する言譯でもあつた。私は強ひても何かの事情を假定して先生の態度を辯護しなければ不安になつた。

私は時時父の病氣を忘れた。いつそ早く東京へ出てしまはうかと思つたりした。其父自身もおのれの病氣を忘れる事があつた。未來を心配しながら、未來に對する處置は一

向取らなかつた。私はつひに先生の忠告通り財産分配の事を父に云ひ出す機会を得ずに過ぎた。

八

九月始めになつて、私は愈又東京へ出ようとした。私は父に向つて當分今迄通り學資を送つて呉れるやうにと頼んだ。

『此處に斯うしてゐたつて、あなたの仰しやる通りの地位が得られるものぢやないですから』

私は父の希望する地位を得るために東京へ行くやうな事を云つた。

『無論口の見附かる迄で好いですから』とも云つた。

私は心のうちで、其口は到底私の頭の上に落ちて來ないと思つてゐた。けれども事情

にうとい父はまた飽く迄も其反對を信じてゐた。

『そりや僅の間の事だらうから、何うにか都合してやらう。其代り永くは不可いひないよ。相當の地位を得次第獨立しなくつちや。元來學校を出た以上、出たあくる日ひから他の世話になんぞなるものぢやないんだから。今の若いものは、金を使ふ道だけ心得てゐて、金を取る方は全く考へてゐないやうだね』

父は此外にもまだ色色の小言を云つた。その中には、『昔の親は子に食はせて貰つたのに、今の親は子に食はれる丈だ』などといふ言葉があつた。それ等を私はただ黙つて聞いてゐた。

小言が一通り済んだと思つた時、私は靜かに席を立たうとした。父は何時行くかと私に尋ねた。私には早い丈が好かつた。

『御母さんに日を見て貰ひなさい』

『さう爲ませう』

其時の私は父の前に存外大人しかつた。私はなるべく父の機嫌に逆らはずに、田舎を出ようとした。父は又私を引き留めた。

『御前が東京へ行くと宅は又淋しくなる。何しろ己と御母さん丈なんだからね。そのおれも身體さへ達者なら好いが、この様子ぢや何時急に何んな事がないとも云へないよ』

私は出来るだけ父を慰めて、自分の机の置いてある所へ歸つた。私は取散した書物の間に坐つて、心細さうな父の態度と言葉とを、幾度か繰返し眺めた。私は其時又蟬の聲を聞いた。其聲は此間中聞いたのと違つて、つくづく法師の聲であつた。私は夏郷里に歸つて、煮え附くやうな蟬の聲の中に凝と坐つてゐると、變に悲しい心持になる事がしばしばあつた。私の哀愁はいつも此蟲の烈しい音と共に、心の底に泌み込むやうに感ぜられた。私はそんな時にはいつも動かすに、一人で一人を見詰めてゐた。

私の哀愁は此夏歸省した以後次第に情調を變へて來た。油蟬の聲がつくづく法師の聲に變る如くに、私を取り巻く人の運命が、大きな輪廻のうちに、そろそろ動いてゐるやうに思はれた。私は淋しさうな父の態度と言葉を繰返しながら、手紙を出しても返事を寄こさない先生の事をまた憶ひ浮かべた。先生と父とは、丸で反對の印象を私に與へる點に於いて、比較の上にも、連想の上にも、一所に私の頭に上り易かつた。

私は殆ど父の凡てを知り盡してゐた。もし父を離れるとすれば、情合の上に親子の心残りがある丈であつた。先生の多くはまだ私に解つてゐなかつた。話すと約束された其人の過去もまだ聞く機會を得ずゐた。要するに先生は私にとつて薄暗かつた。私は是非とも其處を通り越して、明るい所迄行かなければ氣が濟まなかつた。先生と關係の絶えるのは私にとつて大きな苦痛であつた。私は母に日を見て貰つて、東京へ立つ日取を極めた。

私が愈立たうといふ間際になつて、へたしか二日前の夕方の事であつたと思ふが、父は又突然引つ繰り返つた。私は其時書物や衣類を詰めた行李をからけてゐた。父は風呂へ入つた所であつた。父の脊中を流しに行つた母が大きな聲を出して私を呼んだ。私は裸體の儘母に後から抱かれてゐる父を見た。それでも座敷へ伴れて戻つた時、父はもう大丈夫だと云つた。念の爲に枕元に坐つて、濡手拭で父の頭を冷してゐた私は、九時頃になつて漸く形ばかりの夜食を濟ました。

翌日になると父は思つたより元氣が好かつた。留めるのも聞かずに歩いて便所へ行つたりした。

『もう大丈夫』

父は去年の暮倒れた時に私に向つて云つたと同じ言葉を又繰返した。其時は果して口で云つた通りまあ大丈夫であつた。私は今度も或は左右なるかも知れないと思つた。然し醫者はただ用心が肝要だと注意する丈で、念を押しても判然した事を話して呉れなかつた。私は不安のために、出立の日が來てもつひに東京へ立つ氣が起らなかつた。

『もう少し様子を見てからにしませうか』と私は母に相談した。

『さうして御呉れ』と母が頼んだ。

母は父が庭へ出たり脊戸へ下りたりする元氣を見てゐる間丈は平氣である癖に、斯んな事が起るとまた必要以上に心配したり氣を揉んだりした。

『御前は今日東京へ行く筈ぢやなかつたか』と父が聞いた。

『ええ、少し延ばしました』と私が答へた。

『おれの爲にかい』と父が聞き返した。

私は一寸躊躇した。さうだと云へば、父の病氣の重いのを裏書するやうなものであつた。私は父の神経を過敏にしたくなかつた。然し父は私の心をよく見抜いてゐるらしかつた。

『氣の毒だね』と云つて、庭の方を向いた。

私は自分の部屋に這入つて、其處に放り出された行李を眺めた。行李は何時持ち出しでも差支ないやうに、堅く括られた儘であつた。私はほんやり其前に立つて、又繩を解かうかと考へた。

私は坐つた儘腰を浮かした時の落附かない氣分で、又三四日を過した。すると父が又卒倒した。醫者は絶対に安臥を命じた。

『何うしたものだらうね』と母が父に聞えないやうな小さな聲で私に云つた。母の顔は如何にも心細さうであつた。私は兄と妹に電報を打つ用意をした。けれども寝てゐる父

には、殆ど何の苦悶もなかつた。話をする所などを見ると、風邪でも引いた時と全く同じ事であつた。其上食慾は不斷よりも進んだ。傍はたのものが、注意しても容易に云ふ事を聞かなかつた。

『何うせ死ぬんだから、旨いものでも食つて死ななくつちや』

私には旨いものといふ父の言葉が滑稽にも悲惨にも聞えた。父は旨いものを口に入れる都には住んでゐなかつたのである。夜に入つてかき餅などを焼いて貰つてほりほり嚙んだ。

『何うして斯う渴くのかね。矢つ張り心しんに丈夫の所があるのかも知れないよ』

母は失望していい所に却つて頼みを置いた。其癖病氣の時にしか使はない渴くといふ昔風の言葉を、何でも食べたがる意味に用ひてゐた。

伯父が見舞に來たとき、父は何時迄も引き留めて歸さなかつた。淋しいからもつと居

て呉れといふのが主な理由であつたが、母や私が、食べたい丈物を食べさせないといふ不平を訴へるのも、其目的の一つであつたらしい。

十

父の病氣は同じやうな状態で一週間以上つづいた。私はその間に長い手紙を九州にゐる兄宛で出した。妹へは母から出させた。私は腹の中で、恐らくこれが父の健康に關して二人へ遣る最後の音信たよりだらうと思つた。それで兩方へ愈といふ場合には電報を打つから出て来いといふ意味を書き込めた。

兄は忙しい職にゐた。妹は妊娠中であつた。だから父の危険が眼の前に逼らないうちに呼び寄せる自由は利かなかつた。と云つて、折角都合して来たには来たが、間に合はなかつたと云はれるのも辛かつた。私は電報を掛ける時機について、人の知らない責任

を感じた。

『さう判然はつきりした事になると私にも分りません。然し危険は何時來るか分らないといふ事
丈は承知してゐて下さい』

ステーション
停車場のある町から迎へた醫者は私に斯う云つた。私は母と相談して、其醫者の周旋で、町の病院から看護婦を一人頼む事にした。父は枕元へ來て挨拶する白い服を著た女を見て變な顔をした。

父は死病に罹つてゐる事をとうから自覺してゐた。それでゐて、眼前にせまりつつある死そのものには氣が附かなかつた。

『今に癒つたらもう一遍東京へ遊びに行つて見よう。人間は何時死ぬか分らないからな。何でも遣りたい事は、生きてゐるうちに遣つて置くに限る』

母は仕方なしに『其時は私も一緒に伴れて行つて頂きませう』などと調子を合せてゐる

た。

時とすると又非常に淋しがつた。

「おれが死んだら、どうか御母さんを大事にして遣つてくれ」

私は此「おれが死んだら」といふ言葉に一種の記憶を有つてゐた。東京を立つ時、先生が奥さんに向つて何遍もそれを繰返したのは、私が卒業した日の晩の事であつた。私は笑ひを帯びた先生の顔と、縁起でもない耳を塞いだ奥さんの様子とを懐ひ出した。あの時の「おれが死んだら」は單純な假定であつた。今私が聞くのは何時起るか分らない事實であつた。私は先生に對する奥さんの態度を學ぶ事が出来なかつた。然し口の先では何とか父を紛らさなければならなかつた。

「そんな弱い事を仰しやつちや可けませんよ。今に癒つたら東京へ遊びに入らつしやる筈ぢやありませんか。御母さんと一緒に。今度入らつしやると屹度吃驚しますよ、變つ

てるんで。電車の新しい線路丈でも大變増えてゐますからね。電車が通るやうになれば自然町並も變るし、その上に市區改正もあるし、東京が凝としてゐる時は、まあ二六時中一分もないと云つて可い位です」

私は仕方がないから云はないで可い事迄喋舌つた。父はまた満足らしくそれを聞いてゐた。

病人があるので自然家の出入りも多くなつた。近所にゐる親類などは、二日に一人位の割で、代る代る見舞に來た。中には比較的遠くに居て平生疎遠なものもあつた。『何うかと思つたら、この様子ぢや大丈夫だ。話も自由だし、だいち顔がちつとも瘦せてゐないぢやないか』などと云つて歸るものがあつた。私の歸つた當時はひつそりし過ぎる程靜かであつた家庭が、こんな事で段段ざわざわし始めた。

その中に動かすにゐる父の病氣は、ただ面白くない方へ移つて行くばかりであつた。

私は母や伯父と相談して、とうとう兄と妹に電報を打つた。兄からはすぐ行くといふ返事が来た。妹の夫からも立つと云ふ報知があつた。妹は此前懐妊した時に流産したので、今度こそは癖にならないやうに大事を取らせる積だと、かねて云ひ越した其夫は、妹の代りに自分で出て来るかも知れなかつた。

十一

斯うした落附きのない間にも、私はまだ靜かに坐る餘裕を有つてゐた。偶には書物を開けて十頁もつづけざまに讀む時間さへ出て来た。一旦堅く括られた私の行李は、何時の間にか解かれて了つた。私は要るに任せて、其中から色々なものを取り出した。私は東京を立つ時、心のうちで極めた、此夏中の日課を顧た。私の遣つた事は此日課の三ヶ一にも足らなかつた。私は今迄も斯ういふ不愉快を何度となく重ねて来た。然し此夏程

思つた通り仕事の運ばない例も少かつた。是が人の世の常だらうと思ひながらも私は厭な氣持に抑へ附けられた。

私は此不快の裏に坐りながら、一方に父の病氣を考へた。父の死んだ後の事を想像した。さうして夫と同時に、先生の事を一方に思ひ浮べた。私は此不快な心持の兩端に地位、教育、性格の全然異なつた二人の面影を眺めた。

私が父の枕元を離れて、獨り取り亂した書物の中に腕組をしてゐる所へ母が顔を出した。

『少し午眠でもおしよ。御前も嘸草臥れるだらう』

母は私の氣分を了解してゐなかつた。私も母からそれを豫期する程の子供でもなかつた。私は簡単に禮を述べた。母はまだ室の入口に立つてゐた。

『御父さんは?』と私が聞いた。